特攻会報
平成17年2月
第62号

〒105-0001　東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人　特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電　話　03(3432)1090
ＦＡＸ　03(3432)5567

編集人　田中賢一
発行人　菅原道熙

精神の戦いは続く

会長　山本　卓眞

昭和十九年、最初の特別攻撃隊が出撃してから昨年で六十年、また日露戦争開戦からは百年になる。この節目の年に夫々行事も催され、新聞も採り上げたので日本の安全保障に関する国民精神の正常化も多少は進んだかと思ったが、大きな期待はできそうもない。

一方、小泉首相と中国首脳との会談では先方から靖国神社への参拝に反対が表明されている。甚だ心外なのは経済界の一部がこれに呼応して首相の参拝に反対している事である。彼らは経済活動の妨げと思っているようだが、国家の威信をかけた国事よりも私企業の利益を優先せよと言うことになる。中国は、小泉首相を孤立させるべく、日本の経済人に圧力をかける戦術に、まんまと乗せられていることになり、浅慮の限りと言うべきであろう。かつての国鉄総裁石田礼助とは反対に「粗でも野でもないが卑である」と言われてもしかたあるまい。

中国側は、所謂A級戦犯、正しくは昭和殉難者が合祀されていることに反対を唱えているが、

第一に、靖国神社並びにその参拝は日本の国内問題であって他国から干渉を受けるいわれは無い。日中平和友好条約には「相互内政不干渉」がうたわれ、また中国憲法の前文にも記されていると聞いている。

彼らはもはや内政問題ではないとも言うが歴史観は国家、民族によって異なるのは世界的な常識であり、彼らこそ歴史観の覇権主義であろう。

第二に、昭和殉難者合祀の昭和五十三年以後も、大平首相三回、鈴木首相八回、中曽根首相十回の参拝がされており、昭和六十年までの間一度も中国は声を挙げていない。中国の言い分はご都合主義と言わざるをえない。

第三に中国は日本に対し歴史カードを繰り返し使う事により、対日優位に立つと共に国内を意識統一し、政府への不満を転嫁するのを外交、内政戦略としている。

従って中国に対しては、毅然として内政干渉を排除すればよいことになる。以上は既に多くの人から指摘されてきたことであるが、原則として再確認しておきたい。

今年は終戦六十周年に当たる。中国は対日勝利（日本は中共に負けた訳ではないが）記念で昂揚し首相の靖国参拝に激しく当たって来るだろうと言う向きもある。それも余計な気の回し過ぎであって、日本は日本流の追悼慰霊顕彰を粛々と行うべきであろう。

しかし、靖国問題と言い、教科書問題と言い、常に反日的マスコミの煽動がある。政治家のみならず経済人もマスコミに流されるのは情けない。

そこで読者に御願いしたいのは機会を捉えて発言し記事にし、また志を同じくする友好団体と行動を共にして、首相の靖国参拝を挫折させないよう強力に支持して頂きたい。

米国の9・11事件以降、世界の各地のみならず日本の中でも、特攻隊と自爆テロとが同一視されている事にも協力して反論して頂きたい。まず特別攻撃隊は正規の戦闘行為であって、断じて一般人を含む無差別殺傷ではない。

次に特別攻撃隊は純然たる愛国行為であって狂信的な宗教行為ではない。

特攻隊は、世界から指弾されているテロとは全く異なることを繰り返し訴えて頂きたい。

最後に一言申しておきたい事は、ここ一年で千七百人ばかり新入会者があったが、我々の考えを世に宣揚するのは会員を通じてであるから、会員増加について益々の努力をお願いする。

目次

精神の戦いは続く……1
靖国神社初詣の記……2
終戦60年靖国初詣の社頭に想う……3
海軍の「丹」作戦……4
「第一御楯隊の全記録」抜……7
殉国七士の墓……11
戦歿船員追悼記……14
日露戦役における輸送船の遭難……19
対馬丸の悲劇……20
日露戦争に見る特攻精神……21
今期の戦史⑥ガ島の攻防(2)……23
後世に語り伝える方法について……26
高知海軍航空隊之碑白菊特攻隊……27
ある除幕式に参列して……30
今季節の文苑・四字熟語……31
79振武隊田中富太郎大尉の記録……32
世田谷観音寺の文化財……35
（慰霊祭追悼式）明野34　川南35
回天36　予科練37　若潮会38
十七年度事業計画……39
理事長お知らせ……39
総目録……41
新入会員・訃報……44

靖国神社初詣の記

田中　賢一

昨夕からの雪も止み元旦は抜けるような青空、例年松の内に出向いた靖国神社の初詣に、今年は好天につられて元旦に出掛けた。午後二時頃地下鉄九段下駅を出ると、はや靖国神社に向かう人の列。両側に屋台店が並ぶ参道を進むと人の群れは繁く、拝殿に向かう者と屋台店で飲み食いする者との雑踏で、いつもの森厳さはない。しかしこれでいいと思う。多数の御祭神はこのような庶民だったのだから。

新聞の報ずるところでは帝都で初詣の参拝者数は一位は明治神宮、二位が靖国神社だという。明治神宮が東京の氏神様だとすれば、靖国神社は日本の氏神というべきか。

そんなことを思いながら流れに従って進むが、神門あたりまで来ると速度はいよいよ遅くなる。拝殿近くになると踵を接する人の群れは停止状態で、交通整理員が参拝済んだ人は右廻りで退場してくださいと叫んでいる。やっと拝殿に辿りつき、お賽銭を投げ込み拝むことが出来た。

日本人の初詣の心情は、新年のすがすがしい気持にしたり、本年も無病息災を祈願することにある。今日の混雑はすがすがしい気持にはならないが、拝んでいる人の心情は無病息災ではなく英霊に感謝にあると窺える。商売繁昌家内安全ではない。

参拝者の群れを見ると、日本のお国は大丈夫だという感を抱く。しかし心配なのは、中国あたりの干渉に対し言訳がましいことを言い、中には彼等の言分に屈しようとする政治家や経済人のあることだ。敵国の名づけたA級なる殉難者を分祀するとか、靖国神社に代る記念碑建立を企てる政治家の存在は憂慮に耐えない。

A級殉難者合祀の由来は別稿「殉国七士の墓」で述べた通りであるが、国会の決議にもとづいて行ったことを、外国の干渉によって変更するとは、独立国の権威などあったものではない。

護国神社を廃社にした例はあるが、御祭神の一部を取り除くことなど神を恐れぬ所業、日本精神の頽廃に連なる。純正なる歴史を知らず、東京裁判史観に洗脳された者が、国の要路に在って祖国を何処に持ってゆこうとするのか

特攻隊員の遺詠にみる靖国神社

よしや身は千々に散るとも来る春にまた咲き出でん靖国の宮

義烈空挺隊　関　三郎軍曹

20年6月24日　沖縄方面

大君の辺にこそ散らんさくら花今度咲く日は九段の社

第一神雷隊　島村忠一飛曹

20年3月21日　鹿屋南方洋上

春まだき九段の花と咲き散りて勝ちみ戦のもとい開かん

第20振武隊　長谷川実大尉

20年4月2日　慶良間北洋上

靖国のやしろに鎮まるもののふのみ霊に続く若桜かな

海上挺進17戦隊　山本正記伍長

20年2月10日　比島マニラ湾

靖国の桜と咲かんとこしえに南の海に果つるこの身も

回天金剛隊　原　敦郎中尉

20年1月12日　ニューギニア

ホーランディア

終戦60年靖国初詣の社頭に想う

菅原　道熙

18年振りの東京の大晦日の雪が、一夜明けて平成17年元旦は、抜ける様な紺碧の空を仰ぐ好天となった。雪が未だ残り大鳥居に向う緩い坂道は、足を滑らせない様に気を遣う状態であった。

朝9時半、参拝者の数は8月15日に較べると明らかに少い。靖国神社の特性と言うべきか。意外に高令者の姿が少ないのは、雪の道路事情を考慮して、外出を控えた方が多かった所為とも考えられた。若者、子供の姿は心強い。

拝殿前に暫時額ずく。有史以来の敗北を喫して60年、未だ羮に懲りて膾を吹く迷蒙から脱し切れない我が日本の姿を、御英霊は如何に見そなわして居られるのであろうか。

今世紀は大国の恣意による予防戦争、それと絡んだ民族、宗教戦争等、二度の世界大戦が行われた20世紀とは、全く異なった混沌の国際情勢が連綿することであろう。

敢然として言うべきことも言わない弱腰の政府、領海侵犯には爆雷使用が認められているのに、中国の原子力潜水艦が領海外に出てから、海上警備活動を発令、資源探査船の跳梁跋扈を放置、尖閣諸島不法上陸者を逮捕せずに強制送還等、枚挙に遑がない。

小泉首相は8月15日靖国参拝の公約を破った為に、以後迷走参拝を繰返している。今後任期中は断平8月15日に参拝すべきである。

妙な形で結着し兼ねない拉致問題も、元を糺せば何十年に亘って、独立国として当然な毅然とした対応策を取らずに、彼等の蹂躙に委せた我が国の政治の責任である。

無条件に米国に追随することも、亡国、植民地化の途を辿る危険性を孕んでいる。

戦後の焼野原から無我夢中で復興に取組んでいる内に、世界中から奇蹟と瞠目される経済成長を成し遂げたが、その間に只管経済合理性を規範として来た為に、人としての〝こころ〟民族としての五分の魂を喪失してしまったと言えよう。

どうしたら良いのか。総論的には東京裁判史観から脱却して、日本人として日本民族の誇りを再認識すること、そして憲法改正、天を仰いで足許を見詰めることを忘れては、権謀術数渦巻く国際情勢下に、毅然として我が国の独立と尊厳を守って行くことは難しい。戦争の廃絶を究極の国是として堅持することと、矛盾するものではない。

萬感を胸に社頭を去り、屋台を抜けて新年の街頭を歩く。昨今世相が悪化していることは否定出来ないが、日常生活が約束事に従って、整然と動いている。電車は時刻表通りに来るし、買い物をして釣銭を誤魔化されることもない。郵便も宅配便も安心して利用出来る。

この様な何でもないと我々が思っていることが、実はそう簡単ではないのである。88年から3年間暮した南米コロンビアは麻薬とゲリラが有名であるが、その生活体験は大変なものである。一々具体例を挙げればそれだけで一冊の本になる。

40年前、禁酒法の精神が残る米国中西部のイリノイ大学では、学則に構内禁酒が明文化されていた。その様な田舎街でも夜の一人歩きは危険とされ、テキサスの学会へ数人の大学院生と車で出掛けた時には、途中の砂漠で護身用にと拳銃を携行した者もいた。

又当時シカゴから街を通ってニューオルリンズ迄走っていたイリノイセントラル鉄道は（その他乗った他の鉄道も同様）、先づ定時運行されたことがない。而も遅れは時間単位も屢々である。

以上、日本人は共同生活を営む上で如何に優れた特性を有しているかは、このような経験を通じて実感することが出来る。協調性・秩序性・安全性・清潔性等の特性は、筆者は縄文・弥生以来我が国で培われた、水田稲作文化の所産であると信じている。

この世界に冠たる特性は未だ失われていない。改めて日本人は先祖伝来の無形遺産を見直して行けば、今世紀新しい世界秩序の再構築に充分立向える筈だとの思いを新たにした。

そして老い先の長くはない我々世代は、これ等のことを次世代の方々に伝えることが最大の役目と考え、協会として遺霊顕彰と裏腹に我が国の文化と伝統をも次世代会員の方々に継承することに粉骨砕身することであると心に誓い、足は明治神宮へと向った。

海軍の「丹」作戦

「海軍」編集委員会発行の同名の書物に拠る。但し写真は毎日新聞社発行の「一億人の昭和史」より採る。

昭和十九年（一九四四）二月にマーシャル諸島の主要島嶼を失い、米高速空母群がその前進泊地を同諸島に進めてから、大本営海軍部は米正規空母群を泊地で攻撃することを企図した。わが基地航空部隊と機動部隊艦載機を主力として米艦隊をクェゼリン泊地に撃滅しようという「雄」作戦は五月末か六月初頭の月夜に行う腹案であったが、聯合艦隊司令部の壊滅により実施に至らなかった。

大本営海軍部はマリアナ失陥後も、基地航空部隊による敵泊地奇襲の企図を捨ててはいなかった。昭和十九年七月二十一日の「聯合艦隊の準拠すべき当面の作戦方針」のなかでも「努めて奇襲作戦を行い特に好機敵艦隊を其の前進根拠地に奇襲漸減するに努む」と指示されている。海軍部はこの「あ」号作戦以後の敵泊地航空奇襲攻撃を「丹」作戦と呼称していた。

昭和十九年十月三日の満月を中心とした前後十日間に敢行を計画した「丹」作戦は、次のような計画であった。

一、使用兵力

偵察隊　偵察第一一飛行隊　彩雲六機

攻撃隊　攻撃第五〇一飛行隊銀河三六機

攻撃第二六二飛行隊　天山一八機

二、作戦要領

偵察隊　トラックからポナペまたはナウルを利用し、メジュロ、ブラウン、クェゼリン、アドミラルティー諸島を偵察

銀河隊　薄暮に到着するようにいっきょにウエークまたはトラックに進出して補給し、当夜黎明前にメジュロ、クェゼリン、ブラウンを奇襲。

天山隊　機宜硫黄島およびパガンを経てトラックに到り、その後薄暮ポナペに躍進、銀河隊と協同作戦する。状況により躍進基地を硫黄島、南鳥島を経てウエータとする。

十月三日、硫黄島に進出した彩雲五機は、翌四日マリアナ方面の偵察を行ったが空母を認めなかった。通信諜報でも前日の三日に機動部隊が西方に向けて出動したと思われた。「丹」作戦は次の月明期間まで延期されたが、台湾沖航空戦と比島沖海戦のため作戦使用兵力を消耗したので、次回に決行できたのは翌二十年になってからであった。

第二次「丹」作戦

米機動部隊関東来襲二日目の昭和二十年二月十七日、豊田聯合艦隊長官は、そのウルシー帰着の好機を捕えて奇襲攻撃を断行することを決意、宇垣五航艦長官に対し「銀河二四機を基幹とする特別攻撃隊を編成し、ウルシー挺身攻撃を準備」するよう命じた（信電令作第一号）。進撃路として沖縄経由の第一案とトラック経由の第二案が考えられたが、二十二日に至って南九州鹿屋基地からウルシーに直行することになった。沖の鳥島で機位を確認したのちはウルシー北西二〇〇海里に待機する潜水艦に誘導させようという計画である。

二月二十日、宇垣五航艦長官は特別攻撃隊の編成を命じ、攻撃隊七六二空銀河二四機と誘導隊八〇一空二式飛行艇五機で編成、攻撃二六二飛行隊長黒丸直人大尉を指揮官として「菊水部隊梓特別攻撃隊」と命名された。八〇〇瓩通常爆弾一個携行一艦に三機突入と定めた。

通信諜報により米機動部隊は三月七日ウルシーに帰投したと判明したので、豊田長官は三月十日決行と予定し、トラックの彩雲に偵察を命じ、ピケット用潜水艦に進発を命じた。三月九日彩雲はウルシーを偵察し、正規空母五、巡改空母三、特空母七、戦艦八等の在泊と正規空母四、戦艦三その他が入港中であることを報告した。十日午前八時三〇分、攻撃隊が鹿屋基地から出発を開始した直後、第四艦隊からウルシー偵察の写真判読の報告が入電したが電文に不明の点があったため、宇垣中将はその日の決行の中止を発令した。

作戦は翌三月十一日に決行された。天候偵察飛行艇が寒さのため発動機が起動せず一時間遅れて午前六時四〇分発進した。誘導隊も起動不良で午前九時、二機発進、攻撃隊は午前九時二〇分佐多岬上空で誘導機と合同、進撃した。攻撃隊は一機が故障のため午前一〇時二〇分に早くも引き返したほか、発動機故障のため南大東島その他に不時着したもの七機を数えた。午後三時一〇分に沖ノ鳥島の一七〇度一八〇海里において指揮官の視界

内にあった銀河は一六機であった。その攻撃隊がウルシーに到達したときは日没後一時間以上経過しており、目標の発見は容易でなかった。突入したもの二機、しかしその戦果は、翌十二日の彩雲の偵察によれば、沈没艦の跡らしいものは認められなかった。

第三次、第四次「丹」作戦

三航艦と五航艦から各一二組を選出して五月一日「第四御盾特攻隊」を編成し、南鳥島経由トラックに進出して、五月中旬ウルシーを攻撃する計画を立てたが、南鳥島とトラックが今までにない執拗さで爆撃されるので、計画を変更し鹿屋から直接攻撃を行うことにして五月七日決行された。準備した二四機のうち発進時に故障四機墜落一機が出て、一九機が予定より遅れて午前六時四五分発進した。途中機械故障のため引き返すものが多く、沖の鳥島で密雲を突破したものは五機となり、さらに敵機に遭遇したことなどで攻撃を断念して帰投した。

このあと十日の再決行は天候不良のため十二日に延期され、さらに十四日となったが、この日九州南部に米機動部隊の来襲あり、ついに本作戦は取りやめとなった。

ウルシー攻撃のため待機させていた銀河二五機で八月はじめ台湾からレイテの奇襲攻撃を企図したが、敵機動部隊が行動を続けるので、実施の機を得ないままに八月十五日を迎えた。

第2次丹作戦（昭和20年3月）

隊名	階級	氏名	出身県	出身別	生年	戦死場所	戦死日
菊水部隊梓特攻隊（銀河13・鹿屋）	大尉	福田光悦	北海道	海兵70	大10	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	大尉	大岡宏志	東京	海兵71	大12	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	中尉	宮沢富男	愛知	法政大学13	大12	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	中尉	梶尾久男	富山	早稲田大13	大9	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	少尉	高島久健一	秋田	法政大学13	大12	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	少尉	井貝元志	東京	東北大13	大12	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	上飛曹	大久保次郎	北海道	普電練49	大9	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	上飛曹	太田幸司	愛知	丙飛2	大12	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	上飛曹	原田健	愛知	丙飛6	大12	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	上飛曹	山本博泰	愛知	丙飛6	大9	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	上飛曹	下楠園政緑	鹿児島	乙飛16	大14	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	上飛曹	高橋政市	北海道	乙飛16	大14	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	上飛曹	田山亥志雄	熊本	乙飛14	大13	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	上飛曹	桑村坦	愛媛	甲飛8	大12	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	上飛曹	早坂祐	宮城	予備練愛13	大14	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	一飛曹	斉藤善実次	宮城	甲飛11	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	一飛曹	清永徳市	大分	甲飛11	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	一飛曹	山本国友男	和歌山	丙飛10	大14	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	一飛曹	西田信義	香川	乙飛17	大14	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	一飛曹	三ヶ田清馬	大分	乙飛17	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	一飛曹	桐畑人明	滋賀	乙飛17	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	一飛曹	玉井良登	福岡	丙飛8	大13	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	一飛曹	阿南正範	宮崎	丙飛13	大14	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	一飛曹	岩崎幸三	重	乙飛17	大12	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二飛曹	横侃昭	福島	甲飛12	昭2	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二飛曹	須賀正久	愛知	甲飛12	昭2	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二飛曹	葛佐直一夫	徳島	甲飛12	昭2	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二飛曹	林栄和	佐賀	甲飛12	昭2	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二飛曹	原田照	茨城	甲飛12	昭2	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二飛曹	新井喜一	埼玉	乙飛18	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二飛曹	西川茂勝	樺太	乙飛18	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二飛曹	馬場雄	阪	丙飛14	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二飛曹	河村秀之	山口	丙飛15	大14	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二飛曹	磯部定男	千葉	甲飛14	大14	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二飛曹	幡井光明	茨城	甲飛12	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	飛長	松野至康	静岡	乙飛1	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	飛長	中吉輪英夫	東京	乙飛1（特）	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	飛長	三岡実	埼玉	乙飛2（特）	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	飛長	藤川益男	大阪	乙飛1（特）	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	飛長	杉田正治	山口	乙飛1（特）	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	少尉	高橋正	熊本	中央大学13	大13	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	中尉	杉田益男	大阪	彦根高商13	大10	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	上飛曹	古茂田蓮三	愛媛	甲飛5	大11	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	上飛曹	関文武	長野	乙飛15	大14	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	上飛曹	堀越武志雄	茨城	乙飛16	大14	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	上飛曹	新谷睦	鹿児島	乙飛15	大13	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	一飛曹	小山弥五郎	長野	丙飛10	大9	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二飛曹	牧田祐久	鳥取	甲飛11	昭13	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二飛曹	賀正	愛知	甲飛12	昭2	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	二整曹	栗原続	福岡	普整練	大15	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	飛長	加藤幸次	島根	丙飛14	大12	西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
	飛長	久川孝夫		乙飛1（特）		西カロリン・ウルシ泊地	20・3・11
（二式大艇・鹿児島）							

連合艦隊の命令に基づき五航艦がウルシー（グアム南方）奇襲のための「菊水部隊梓特別攻撃隊」を編成したのは20年２月末、補給のため同基地へ帰着する米機動部隊が目標だった。出撃前の特攻隊員。

二式大艇に乗り組む801空の誘導隊（指揮官・杉田正治中尉）鹿屋を出発後約10時間「ワレ奇襲ニ成功ス」と入電。銀河11機が突入に成功と判断されたが、命中は米空母ランドルフに１機だけだった。攻撃隊長は福田幸悦大尉。

「第一御楯特別攻撃の全記録」抜（再続）

第1～2は57号に、第3～10は59号に掲載済

第11章　第一御楯隊特攻作戦の思い出

広瀬正吾飛曹長手記

昭和57年11月1日、硫黄島協会主催の第14回慰霊渡島に参加、硫黄島摺鉢山山頂に建立された第一御楯特別攻撃隊の慰霊碑の前に立った時、38年前のあの日の作戦行動の思い出が、昨日の事のように頭の中を駆けめぐり、感慨無量、暫く立ちつくしていた。

その日、私が操縦した彩雲1番機に与えられた命令は、「硫黄島を8時発進、以後マリアナ諸島北部のアグリガン島まで零戦12機を誘導した後、サイパン・テニアン両島上空1万m以上の高度を飛び、零戦隊攻撃の戦果を写真偵察せよ」というものであった。しかし、この命令は実行となると大変困難が伴った。

第1御楯隊の碑

①零戦隊誘導

第1任務の「誘導」であるが、私はその1年前、艦偵「彗星」で、トラック島からラバウルへ移動する零戦隊を誘導した事があった。この時の零戦隊指揮官納富健次郎大尉（海兵62期）は、戦歴豊富な老練飛行隊長であった。それが今回の指揮官大村謙次中尉（海兵72期）は、飛行学生卒業後数か月しか経っていない上、戦歴も極めて少ない。その人が3航艦長官寺岡謹平中将が陣頭指揮する、重大任務の指揮官を命ぜられたのである。大村中尉の精神的負担は如何ばかりか、心中察するに余りあるものがあった。

そこで私としてまず考えたのは、大村中尉が誘導機を全面的に信頼し、安心してついて来れるような、模範的誘導飛行をする事であった。それには我が機が正確な針路保持と、一定の速度、それも零戦の巡航速度と同じ速度を保持する事である。これが適確に出来ないと、誘導される大村中尉を精神的肉体的に疲れさせ、爾後の攻撃行動に重大な支障を来しかねない。

この針路と速度を一定に保持する事は相関関係にあり、彩雲の巡航速度が零戦の巡航度より速すぎるからといって、誘導機がジグザク運動をすると、零戦隊は続行することが出来なくなる。それどころか僅かな針路のふらつきすら避けなくてはならない。しかも誘導機と分離後、戦闘行動に移る零戦隊の速度を、1節でも上げるよう求める事は、行動に余裕のない零戦隊の燃料消費をそれだけ増すことであり、これも許されない。従って、我が機の燃料消費を犠牲にしても、一方的に彩雲の速度を落とし、零戦の巡航速度に合わせる以外に方法はなかった。

前回の彗星による長距離誘導の際、ラバウルに着陸後、納富大尉に「一寸速すぎたよ」と一言注意されたが、今回の新鋭機彩雲は彗星より更に巡航速度が速く、零戦のそれを約80㎞も上回っていた。しかし彩雲とても、その後に戦果偵察という重大任務があり、総飛行距離約3,000㎞以上という長距離飛行をするのであるから、その燃料も極力節約しなければならない。まさに二兎を追う至難の要求である。

このような任務飛行は、私が約1年前、横須賀航空隊で担当した彩雲の実用実験中のテスト項目には無かった事である。従って、彩雲で低速度長時間飛行をした経験も、零戦と彩雲が一緒に飛ぶ誘導訓練も全くした事がない。何しろ今回の2時間半、800㎞に及ぶこの誘導命令は、前日硫黄島に来てから開かれた作戦会議の時、初めて説明されたのである。しかし、我々は既に土俵に上がり、待ったなしの行司の軍配が引かれ、勝負に立ち上がった以上、その責任は何としても果たさねばならない。

誘導中彩雲の巡航速度を下げようとしてエンジンの馬力を落とせば、却って燃料消費は増す。とすればスロットルレバー（車のアクセルと同じ）を巡航速度に調節したまま飛行速度を落とす方法を構じなければならないが、その方法が一つあった。

それは編隊を組んでから考えついた事であるが、何か空気抵抗になる物を出せばよい。人間困難に遭遇するととっさに良い考えが浮かぶもので、私は離着陸時に揚力を増加する為に使用する主翼前縁のスラットと後縁のフラップ翼を少々操作してみた。ところがこれが旨い具合に全く一発で的中したのである。よけいに出すと振動があるが、

いろいろに両方を少しずつ操作し、硫黄島発進後数分で振動も無く、零戦の巡航速度140節にぴたり調整することが出来た。

だが、この速度では彩雲は失速寸前の状態になり、操縦するのに骨が折れる。しかも、その状態で一定の針路を保持しつつ2時間半飛行したのであるから、私がこの作戦で最も苦労した点だったといえよう。

当日の天候は快晴、誘導には最適の状況であった事は、誘導する側も、される側も有り難かった。それにしても、零戦隊は指揮官大村中尉始め、若年搭乗員が殆どであったに関わらず、離陸後編隊を組むのも素早く、小生苦心の誘導に応え、2時間半もの間、実に見事に付いてきてくれた。心から賞賛したい。

②戦果偵察

次は第2任務の「戦果偵察」である。古来偵察の第1要素は、「敵に見られず、敵を　見る」この一言につきる。陸海空の作戦に共通の課題である。そして第2の要素は、必ず帰還して「報告する」事である。

ところで、今回のように敵基地偵察を任務とする場合、目で見た事を記録し、報告する目視偵察では、その報告内容に、偵察員の能力による個人差が大きく現れ、不正確となることが免れない。且つその報告は詳細に亘ることが不可能で、どうしても大まかになってしまう。従って目視偵察の報告は総合的に信頼性が低いものであった。この信頼性を高くする為には、低い高度で長時間、何回も偵察を繰り返さなければならないが、それでは忽ち敵戦闘機に撃墜されてしまう。

これに対し写真偵察では、敵地の真上を飛行しつつ、直下の敵基地を連続撮影し、いわゆる航空地図を作製する。これを専門の技術士官が、拡大し綿密に検査すると、目視では到底判らない敵陣地の詳しい状況・配置から、飛行場の滑走路の長さ・幅・誘導路の状況・敵機の機種・機数まで、ドンピシャリ判ってしまうからこれに勝る報告はない。しかも、敵戦闘機襲撃の心配のない、高度1万m以上からでも撮影は可能で、通常1回の直上飛行でこと足りた。

但し、一つだけ問題があった。雲である。こればかりは偵察機の天敵のようなもので、雲に妨げられ写真偵察不能引き返すという戦例が屢々あった。といって、雲の下へ出て撮影しようとすれば、敵戦闘機が群がって襲来する。

今回の場合も写真偵察を命令されたのであるから、撮影したフィルムは必ず持ち帰り司令部に提出しなければ偵察を決行した意味がない。我々には途中の不時着・自爆が許されなかったのである。

③飛行計画

しかし、米軍は優秀なレーダーを備え、接近すれば必ず発見捕捉され、これに誘導される迎撃戦闘機の攻撃を受ける事は必至である。そこで問題は、この迎撃を如何にし交わし、高度1万m以上で敵地上空に侵入するかという点にあった。この高度では米軍の高射砲といえどもその射弾は届かず、敵戦闘機にしても上昇限度ギリギリで、浮いているのが精一杯である。激しい攻撃行動をしようとすれば、忽ち高度が数百mから千mも低下してしまう。従って、攻撃は絶対不可能である。

そこで求められるのは適切な飛行コースの選定と、厳重な空中見張りが大切である。

飛行コースは、前日の作戦会議終了後、宿舎で機長南巍少尉と慎重に検討した結果、レーダーの捕捉距離外の、マリアナの列島線西方167km、針路180度のコースを、高度を上げながら、一旦テニアン島の南西地点まで南下する。ここで大きく左へ旋回、針路63度で一直線にテニアン島南端目指して更に上昇しつつ飛ぶ。このコースに入ってからは、必ず敵レーダーに捕捉され、敵戦闘機が迎撃に向かってくる。しかし、我が機はその迎撃以前に、余裕をもって高度1万m以上に上昇し、テニアン、サイパン両島を眼下に、自動撮影装置付の垂直写真撮影機で、敵基地群を撮影しつつ北上、一航過が終わったらそのまま帰途につく、

以上が予定した飛行計画であったが、このうちの南下コースは南機長の提案で、三沢参謀から指示されたコースより、列島線から更に西へ離れたコースを設定した。これはレーダー捕捉の危険性をより少なくする為の安全策であった。

次に空中見張りであるが、これはレーダーの発達した今日の飛行機でも、軍用機・民間機を問わず、大切な事とされている。まして、当時レーダーを搭載していない彩雲ではことさら重要であった。大編隊で行動する機種はまだしも、彩雲のように常に単機で飛ぶ場合、見張りが疎かになったら、いつ何時敵戦闘機の奇襲を受け、撃墜されるやも知れない。現に私は、1年前ラバウルで艦偵彗星を操縦索敵中、奇襲を

避ける為、これなら安全と思われた雲量10の殆ど切れ目のない雲の直ぐ下を飛んでいて、敵戦闘機に後下方から撃ち上げられ撃墜された苦い経験がある。

従って、敵戦闘機をいち早く遠距離で発見し、速やかに避退する。「三十六計逃げるに如かず」これこそ彩雲に限らず、偵察機にとっては最善の対戦闘機戦法であった。

まして彩雲は同高度では敵戦闘機よりも優速なのである。唯一の武装であった電信員席の7・9㎜銃は殆ど役に立たないとして、ある彩雲隊では搭載を止め、スピード向上を図ったという。このようにして敵戦闘機の接近以前に、安全高度1万m以上に上昇し、悠々と敵地上空を飛行、写真偵察を強行する。これが彩雲の真骨頂であった。但し、空飛ぶサラブレッド彩雲といえども、言うは易く、行うは難し。騎手として乗りこなすには、相当熟練した操縦技倆と偵察経験を要したものである。

全行程3,140㎞、7時間余りの間、身動き出来ない狭い座席に、座るといっても、腰バンド・肩バンドに締めつけられたまま、いつ、どの方向から敵戦闘機が襲撃してくるか判らない状況下、張りつめた気持ちの連続また連続、見張りは簡単な作業だが、全く気の許せない、最重要な機上作業である。

④世界に誇れる彩雲の性能

ところで彩雲は、彗星と比べ視界が良好である上に、乗員が3人であるから、各員の見張り分担範囲が少なくなり、それだけ密度の濃い見張りが可能となった。

更に加えて、極めて有利な点がもう一つあった。それは最後部の電信員席が後ろ向きに設けられている事である。在来機のように最後部座席が前向きだと、首を後ろに回して後方の見張りをする事は、極めて困難である。

その点、彩雲を操縦する私としては、頭の後ろにもう一つ眼がついたようなもので、後方見張りを安心して委せられるようになった点、実に有り難かった。

なお、この時の電信員西村上飛曹は、後上方、後下方共、最も危険度の高い上昇開始後の見張りが、満点だった。私は、先輩の老練にして緻密な偵察員南少尉と、優秀な電信員西村上飛曹に恵まれた事を今でも感謝している。

作戦当日は前記計画通り飛行し、作戦会議で打ち合わせた通り、零戦隊の攻撃予定時刻の10分後に、我が機はテニアン島南端上空10,450mの高度で、テニアン・サイパン両島を縦断する写真偵察コースに侵入した。

それまで敵戦闘機を見ず、敵地上空に侵入してから、遥か下方5～6,000mを上昇する敵機の姿を認めたが、この高度差では攻撃を受ける心配は全くなかった。写真機の作動も順調で、偵察目的は予定通り達成したかに思えた。

だが、偵察コースの最終点、サイパン島北端上空に達しても、目的地サイパン島南部のアスリート飛行場は勿論、サイパン・テニアン両島のどこにも、零戦隊攻撃の成果を示すはずの黒煙が見当たらない。

そこで、一航過で帰還せよとの命令に違反するが、何としても戦果確認を果たしたいと思い、機長と打ち争わせ180度旋回し逆コースを飛んだが、この二航過目が終わっても、遂に地上に異常変化は起こらなかった。

その理由は、硫黄島帰還後判った事であるが、零戦隊の攻撃時刻が大幅に遅れた為であった。

この間、地上は30度の暑さでも1万m上空は零下30度、操縦操作をする手足の指は完全に凍えて痺れてきた。予定時刻を30分以上オーバーして必死に頑張ったが、耐寒も限度に近づいていた。

また、酸素・燃料も予定以上消費している。既に1万m以上を1時間近く飛行し、これ以上高高度飛行を続ける事は帰還も望めなくなる。今が決断の時であった。南機長の賛成を得て、硫黄島へ向け帰途についたのである。

持ち帰るフィルムは115枚全部撮影済で、その内容が期待された。

当時、最高速度・航続距離・最高上昇限度・高高度飛行性能等、彩雲の性能は世界に誇れるもので、「我に追いつく敵戦闘機なし」という彩雲機上から発した電文は、全海軍の士気を高めたとさえ言われている。

本来艦載機として設計された彩雲が、せめて2・3年前に完成採用されていたならば、と考えるのは私達だけではないであろう。

―以上―

第12章　戦後判明した戦果

すでに述べたように、彩雲1番機による作戦決行当日及びその後2回の戦果確認任務は、残念ながらすべて不成功に終わったが、戦後、米軍の記録・資料を調査した結果判明したものを次に記述する。

この日、アスリート飛行場に配備されていたB29は119機であるが、そのうち81機が第2回の東京空襲の為に発進（うち19機が故障で脱落、間もなく基地に引き返した）、残存したB29は引き返した19機を含め57機となった。しかし、この数は零戦隊の獲物としては充分過ぎるものだったと思う。サイパン特別銃撃隊の戦果は、米軍の或記録によると、B29を4機破壊炎上、6機に大損書、23機に少損害を与えた事が判明している（防衛庁戦史部監修の戦史叢書による）。

その為、当時マリアナに展開していたB29部隊（第21爆撃団）の司令官ハンセル准将は、アスリート飛行場のB29をグアム島に移動分散する処置をとり、硫黄島攻撃の強化を計画している。

しかし、本作戦の戦訓は、この種の攻撃続行を困難なものとし、以後零戦によるマリアナ攻撃は遂に一度も実施されなかった。

但し、終戦直前、マリアナのB29撃滅のために、陸海共同の空挺隊による「剣」進攻作戦が計画されたが実現はされなかった。しかし当時の戦況と我が軍の航空兵力の戦力を考えると、もし実行されたとしたら、沖縄作戦当時の悲劇、人間爆弾「桜花」作戦のように、マリアナ到達前に全機撃墜の悲運を味わったのではなかろうか。

この作戦で彩雲1番機が撮影したフィルムを現像したところ偏流修正がほぼ正確で、完璧な航空写真地図を作製出来た。これを詳しく検討した結果、サイパン、テニアン両島にB29を含む大型機が二百数十機、各種戦闘機二百機その他軍事施設多数の所在が解読されたと聞く。

この写真地図は間もなく、昭和天皇天覧の栄に浴した事が我々当事者にも伝えられた。

また、この作戦に対する表彰状が、第3航空艦隊司令長官寺岡謹平中将名で交付された。

その表彰状は平野誠中尉（海兵72期）と南巍少尉の連名で書かれたもので、夫々別作戦だが、その全文を記述する。（行間及び片仮名文を平仮名文にする等適宜書き換える）

表彰状

平野海軍中尉の指揮せる偵察12飛行隊偵察機隊
南　海軍少尉の指揮せる偵察12飛行隊偵察機隊

「マリアナ」方面に於ける敵情偵察の命を承くるや海軍中尉平野誠の指揮せる偵察第12飛行隊偵察機は昭和19年11月9日及び23日の再度に亙り長駆「グアム」島偵察を実施し同島に於ける敵情を明らかにせり

又南海軍少尉の指揮せる同隊偵察機隊は昭和19年11月26日、27日戦闘機隊の攻撃に協力「サイパン」「テニアン」に於ける敵情を偵察し作戦に寄与するところ甚大なるものあり仍って茲に其の功績を認め表彰す

昭和19年12月1日

第3航空艦隊司令長官海軍中将
従四位勲一等功三級寺岡謹平

硫黄島にある碑

大村隊長

炎上するB－29

殉国七士の墓

田中　賢一

敵国の報復裁判でA級戦犯と言はれ処刑された七士の碑（墓）は二ケ所にある。七士は昭和23年12月23日に処刑され、その日のうちに横浜の久保山火葬場で荼毘に付せられ、遺骨は何れかに持ち去られた。東京裁判弁護人の三文字正平氏、火葬場長の飛田美善氏、火葬場隣の興禅寺住職市川伊雄師の三人は、米兵が箱に納めきれずに捨てた遺骨を、夜間忍び込み拾い集め隠匿し、最後は熱海伊豆山興亜観音に隠し供養していた。

講和条約発効後の昭和34年になって、興亜観音奉賛会長高木陸郎氏が遺骨を埋葬し碑を建てた。碑文は吉田茂氏の揮毫である。

熱海伊豆山興亜観音境内碑文は吉田茂揮毫
嘗て不逞の輩に爆破され切損したが、修復した。

翌35年三文字氏等は興亜観音にある骨壷から分骨し、愛知県の三ヶ根山に「殉国七士墓」を建てた。三ヶ根山は比島観音をはじめとし比島に関係ある戦死者追悼の部隊碑が沢山建っているが、当事者以外余り知られていないのは残念である。

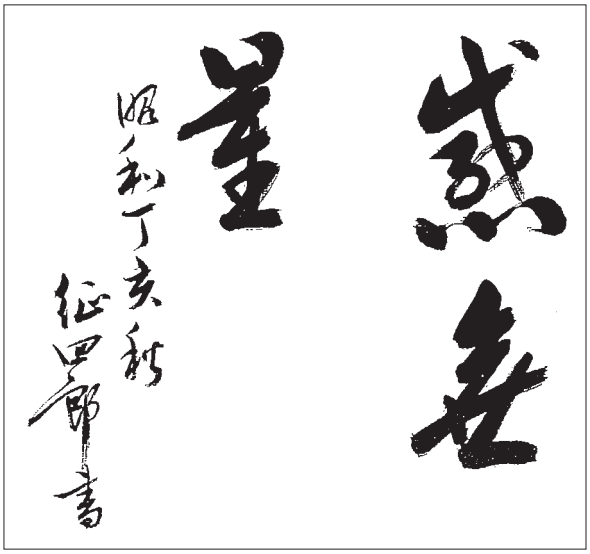
ここに七士の遺墨を紹介し、殉難者達の心情を偲んでみることとしたい。

愛知県幡豆郡幡豆町三ヶ根山にある

彼らのいうA級戦犯が祀ってある靖国神社に、小泉首相が参拝したとて中国が文句をいうが、国内問題に口出しするなと何故撥ねけないのか。そもそも戦犯なごというものは日本にはない。靖国神社に合祀してあるのは歴とした根拠がある。昭和28年に「戦傷病者戦歿者遺族等援護法」が改正され、戦争裁判による死亡者も適用対象者として認められ、遺族に対して一般戦歿者と同様に遺族年金が支給されるようになった。

戦後の合祀は厚生省引揚援護局が祭神名票を神社に送付することによって行はれていた。援護局は戦争裁判による死亡者も戦歿者と認めるようになったので、その手続きをしたのであって神社はそれに従ったまでのことであり、首相が靖国神社に参拝するのは合法というよりそうでなければならないことである。

（最後の職　以下同）
第七方面軍司令官　板垣征四郎大将



主な経歴　期は士官学校の期別を示す数字は昭和の年号

板垣征四郎　16期　陸軍大将　4関東軍高級参謀　満州事変を起す　7満州国顧問として満州国育成に尽力　12第5師団長　13陸相　14支那派遣軍総参謀長　16朝鮮軍司令官　20第7方面軍司令官

ビルマ方面軍司令官　木村兵太郎大将

莫妄
想
兵太郎書
妄想スルナカレ

木村兵太郎　20期　陸軍大将　14第32師団長　15関東軍参謀長　16陸軍次官　19ビルマ方面軍司令官

内閣総理大臣　東条英機大将

一誠排
萬難
昭和丁亥
晩秋　英機
一誠　萬難ヲ排ス
昭和二十二年

東条英機　17期　陸軍大将　12関東軍参謀長　13陸軍次官　15陸相　16首相兼陸相　19兼参謀総長　19総辞職

教育総監　土肥原賢二大将

除行踏
断流水
声賢二
徐行　踏断ス流水ノ声
そろそろ歩み
流水の音を踏み消す

土肥原賢二　16期　陸軍大将　8奉天特務機関長　北支における各種政治工作を行う　14以降第5軍司令宮、航空総監、第12方面軍司令官、第1総軍司令官、教育総監等を歴任

内閣総理大臣（後外務大臣）広田弘毅

飛龍
在天
弘毅書

飛龍天ニ在り
（出典「易経」乾篇）

広田弘毅　東大卒　外務省に入り　各種要職歴任　8斎藤内閣ついで　岡田内閣の外相　11の226事件後　組閣　約1年にして総辞職その後近衛内閣で三たび外相を勤めた　首相の時日独防共協定の調印　前後の外相時代対支強行姿勢で臨んだ

中支那方面軍司令官　松井石根大将

至道
無難
丁亥秋日
石根

至道ニ難無シ
昭和二十二年秋日

松井石根　9期　陸軍大将　10予備役となったが12現役復帰し中支那方面軍司令官兼上海派遣軍司令官

第十四方面軍参謀長　武藤章中将

春風接人
秋霜自奉
章書

春風人ニ接シ
秋霜自ラ奉ズ

武藤　章　25期　陸軍中将　12中支方面軍参謀副長　14陸軍省軍務局長　19第14方面軍参謀長

戦歿船員追悼記

今次大戦で我が海運界は保有船舶の大半を喪失し、陸海軍を上まわる高率の船員が国に殉じた。戦争末期になると、**危険極まりない海域に向う船員の心情は、特攻出撃と異なることがなかったと思う。**

ここに追悼の意をこめ、数値を挙げて史実を綴り、三浦半島観音崎公園にある戦没船員の碑の紹介をしようと思う。

今次大戦の大部は太平洋の島々が戦場だったので、軍隊輸送はもとより兵站は総て船舶に依らなければならなかった。従って船舶は戦力の主要素であった。大戦中に二、三九四隻、八、〇一八、一二二総屯もの膨大な船腹を失い六〇、三三一名の船員が戦死した。

戦死者の霊名は戦没船員の碑に納められているので、先ずこの碑について

所在地　横須賀市鴨居4丁目　観音崎公園内

交　通　ＪＲ横須賀駅　京浜急行横須賀中央駅から観音崎行バス約30分　京浜急行浦賀駅から観音崎行バス15分

竣　工　昭和45年3月25日

建碑の募金趣意書の冒頭の文章は達意であるので、その部分だけ引用する

〝わが国は現在、世界有数の海運・水産国として、世界経済の繁栄に貢献しておりますが、過般の戦争におきましては、保有船舶の大多数を失い、海運水産界は、文字通り潰滅状態におちいり、このために尊い生命を失った商船魚船の乗組員は六万二千余名に達しました。

この事実はこの戦争における船舶の業務が、いかに激烈、危険をきわめたかを物語るものでありますが、戦後二十余年を経過したいまでは、この犠牲も一般にはあまり知られないままに、次第に忘れ去られようとしています。〟

戦争中の船舶の損耗

「武器なき海」（海上労働協会発行）に拠る

第一表　戦争開戦時の保有船腹区分（一〇〇総トン以上の汽船）

区分		隻	総トン
陸軍（A船）	貨物船	四三八	二、一三六、七六四
	油送船	一〇	一三、四八〇
海軍（B船）	貨物船	四九五	一、四一〇、七八二
	油送船	五二	三二二、八九〇
民間（C船）	貨物船	一、七三三	二、三五一、三五四
	油送船	四四	一四八、七三〇
合計		二、七六三	六、三八四、〇〇〇

陸海軍は満州事変、支那事変を通じて、すでに必要に応じ相当の船舶を徴用していたが、開戦時には計画通り陸軍徴用船（A船）二一五万総トン、海軍徴用船（B船）一七三万総トンを保有した（第一表）。民間商船はいったん徴用されると、煙突の社章をぬりつぶし、マストには軍の輸送船旗をかかげ、船員には軍属の身分が与えられて〝輸送戦士〟の任務を背負わされたのである。

また、民船（C船）の運行は、総動員物資の輸送にあたるために、新たに設けられた特殊法人（船舶運営会）によって、国家管理方式がとられた。

商船はこうして、A船、B船とC船の違いはあったけれども、いずれも戦時海上輸送の任務をおびて、戦火の海を航海することを余儀なくされたのである。だが、輸送船舶の損耗は大本営が見込んだ量をはるかに上まわって、戦争海難による喪失船舶は飛躍的に上昇の一途をたどった。（第二表）

第二表　遭難種類別の喪失船腹量（昭和一六年一二月八日～昭和二〇年八月一五日）

遭難種類＼年別	昭和一六年 隻数	昭和一六年 総トン数	昭和一七年 隻数	昭和一七年 総トン数	昭和一八年 隻数	昭和一八年 総トン数	昭和一九年 隻数	昭和一九年 総トン数	昭和二〇年 隻数	昭和二〇年 総トン数
空爆	三	一六、九〇一	四三	二〇六、四二四	一一五	三〇、二七	三九七	一、二五六、五〇九	三四四	八〇二、六五六
雷撃	六	三、六七三	一四二	六〇九、九二五	二九三	一、三二二、三五三	五六七	二、三八八、七〇九	一四五	四二〇、八二六
触雷	〇	〇	一二	四八、六七〇	九	一七、六四四	一五	三三、六二四	二二四	四六八、三二五
砲撃	〇	〇	三	一四、〇九二	二	三、八五二	〇	〇	四	二、四八六
自爆	〇	〇	一	四、三八三	一	三、八八三	〇	〇	一	五、二四四
不詳	〇	〇	三	一、四三四	六	一〇、三二六	二三	一一、二三八	三五	二〇、四一三
その他	〇	〇	〇	〇	〇	〇	八	三、九四六	三	二、六五八
合計	九	四八、五七四	二〇四	八八四、九二八	四二六	一、六六八、〇八六	一、〇〇九	三、六九四、〇二六	七四六	一、七三二、五〇八

しかし、急速に船腹拡充をはかろうとした計画造船は、当時の日本の機械工業の生産方式ではその能力に不足していたし、より根本的には鉄鋼等の基礎資材の生産能力自体が不十分であった。その生産量は十八年度に一一二万トンと倍増し、十九年度は一五八万トンと頂点となったけれども、二十年度は激減して、もはや造船計画は絶望状態におちいったそして、残された木船建造の途も、ほとんど計画だおれに終わってしまったのである。

A・B・C船運用の一元化は、戦争当初からとられるべき措置であったにもかかわず、この運用にあたる「海軍総監部」制度が大本営に設けられたのは、終戦近い二十年五月のことであった。C船の国家管理のために設けられた「船舶運営会」ははじめ、その実際の運航面では、いくつかの大手船会社グループが運航実務者として、船員の配乗、船舶の運航にあたっていた。戦争の進展とともに、運航実務者制度を廃止して運営会が実質的に一元管理の方式をとるようになり、後には政府と一体となったわけである。

戦争中の船舶の損耗は、輸送船舶の損耗は大本営が見込んだ量をはるかに上まわって、戦争海難による喪失船舶は飛躍的に上昇の一途をたどった。（第二表）

そのために軍は、何回となく徴用船腹量を増加修正し、また計画造船の促進をはかった。足りない船腹量のなかで、徴用をめぐる陸海軍の争いは深刻の度を加え、徴用船の増加は必然的に、物資動員計画によるC船輸送力を減少させる結果を招いた。

この矛盾を解決するためにとられた措置は、戦時標準型船による計画造船と、A・B・C船運用の一元化であった。

しかし、急速に船腹拡充をはかろうとした計画造船は、当時の日本の機械工業の生産方式ではその能力に不足していたし、より根本的には鉄鋼等の基礎資材の生産能力自体が不十分であった。その生産量は十八年度に一一二万トンと倍増し、十九年度は一五八万トンと頂点となったけれども、二十年度は激減して、もはや造船計画は絶望状態におちいったそして、残された木船建造の途も、ほとんど計画だおれに終わってしまったのである。

A・B・C船運用の一元化は、戦争当初からとられるべき措置であったにもかかわず、この運用にあたる「海軍総監部」制度が大本営に設けられたのは、終戦近い二十年五月のことであった。C船の国家管理のために設けられた「船舶運営会」ははじめ、その実際の運航面では、いくつかの大手船会社グループが運航実務者として、船員の配乗、船舶の運航にあたっていた。戦争の進展とともに、運航実務者制度を廃止して運営会が実質的に一元管理の方式をとるようになり、後には政府と一体となったわけである。

船員の戦い

財団法人海上労働協会発行の「武器なき海」には戦争中航海士、機関士などの体験談が一〇点載っている。輸送船の敵は潜水艦と航空機であるので、それらとの生々しい戦闘場面の出ている個所を抜すいしてみる。

対潜水艦戦闘

筆者はみいり丸の一等航海士である。この船には二五粍連装機銃八基、単装機銃四基が船橋と船尾に半数づつ装備されており、更に短二〇糎砲一門、爆雷投下台を持っている。

極度の緊張した見張りと死物狂いのジグザグ逃避運動を長いことつづけた気がしたが、時間はいくらも経っていなかった。二時四十分ごろ、船橋左舷翼で雨と飛沫に濡れながら双眼鏡をガーゼで拭いつつ懸命な見張りをつづけていた私は、船首より右三十度方向、双眼鏡一杯に映る同行の潜水艦らしいものを発見した。距離は近い。味方海防艦か？……とあらためて注視したが正しく潜水艦である。艦橋は小さくすっきりしていてマストがない。前部甲板は水面すれすれで低く、後部甲板は波浪に洗われている。味方撃ちを警戒して私はことさらに心を落ちつけ、じっくりと観察した後、間違いなく潜水艦であることを確めてから、確信を特って大声で叫んだ。

「右三〇度、六〇〇、敵潜水艦！」

全員その方向に双眼鏡を向けたが見つける者がない。半信半疑の態である。私はもう一度叫んだ。

「右三〇度、六〇〇、敵潜は同行！」

そして寸刻を争う重大時機を感じた私は、コンパス・ブリッジの警戒隊長に向かって、

「警戒隊長！　右戦斗頼むぞォッ！潜水艦だッ！」

と、絶叫するや、船長の傍に走り寄り、息せき切って、

「船長ッ！潜水艦、右三〇度、同行です！メガネ一杯に入ります。間違いありません！」

と、口早に興奮して報告した。私は、早く面舵一杯にとって体当りしてもらいたい気特にかられていた。

幸いに、みりい丸が敵潜に向首するのに邪魔物はない。

「面舵一杯」

重々しい船長の号令は真っ暗な船橋にこだまし、船長が一瞬のうちに運命を賭けて体当りを敢行せんとする重大決意をしたことを単的に示していた。船橋に詰めていた全見張員、警戒隊員は、船長の一大決意をただちに全身に感じ、これを同時に自分の決意とした。

まさに「当って砕けろ」である。首尾よく敵潜を乗り切って撃沈しうるか？それとも敵潜の抱える魚雷が乗り切りとともに炸裂してみりい丸も華と散るか？「面舵一杯」の号令に、みりい丸はあたかも巨大な猛牛が敵に向かって怒り狂って突進するかのごとく、敵潜に向かって回頭し、肉迫を開始した。

機関室、無線室にも「浮上敵潜体当り用意」が発令され、船尾爆雷班には「爆雷戦用意」のブザーがひびきわたって、一瞬のうちに対潜戦斗、体当りの準備は整った。彼我の距離は刻々に縮まる。

ダダダ……ッ！ダダダ……ッ！右舷船橋楼上の二五粍機銃五門につづいて、船尾楼上の五門も火を吹き出した。すでに肉眼照準可能の距離に入ったのだ。紅い曳光禅が幾条となく白い小雨の夜を切って敵潜に向かって飛んでゆく。五～六秒間隔で機銃射撃は繰り返される。時間の経過とともに回頭惰力も加わり、急速回頭がつづけられ、距離も迫ってきた。肉眼ではっきりと敵潜が見えてきた。

ローリングが大き過ぎるので左舷に傾斜している間は、目標が死角内に入って射撃が中断されてしまう。そのかわり右舷に傾斜している間は射撃が容易である。射手は右舷傾斜中の時間をフルに撃ち抜こうと懸命である。

体当りをねらって急速回頭をつづけているが、みりい丸はどうも敵潜の前面に出てしまいそうな態勢である。敵潜はいち早くみりい丸の向首を感じとって全速後進をかけているのであろうか？それとも、はじめから距離が近過ぎたためみりい丸の回頭力では向けきれなかったものか？依然として船首よりの方位は変わらず、距離だけがぐんぐん縮められてゆく。もはや距離は二百メートルか三百メートル！右四十五度方向である。

左舷傾斜から復元して右舷に傾斜してゆく間、二五粍機銃はこのときとばかり必中の弾道を画いて全弾命中！坂落しに射ち出された曳光弾は正確に司令塔に命中して、急角度に右に左に跳弾となってはねかえり、カチンカチンという金属音が聞こえてくるようだ。明らかに敵潜は走っていない。急速潜航の態勢である。発見時よりも水面上の露出部が少なく、司令塔だけを水面上に残して前後部甲板は水面下にあり波浪に洗われ真っ白に泡だって見える。早く孔を穿けてしまわなければ潜られてしまう。すでに距離は二百メートル以内！小気味よい坂落し機銃弾は全弾

命中！周章狼狽の敵潜の艇内の様子が目に見える。

「万才！万才！」

期せずしてみりい丸の船橋には歓呼のどよめきが湧きおこった。

船長は吹きつける雨もものかわ、船橋前面の窓ガラスを一杯に押し開け、窓枠をつかんで仁王立ちとなり、「船よ早くまわれ」と満身に力を入れ、体を右にグゥーッとねじりながら彼我を睨んでいる。が、面舵一杯急速右回頭のみりい丸は残念ながら敵潜に向首できない。急速に距離を縮めながら敵潜はわずかずつ右にかわってゆく。右五十度、百メートルぐらいにいたってみりい丸は、敵潜のわずか前面にでることが確定的となった。船長は彼我の距離を最短とする位置までなおも右回頭をつづけた。もはやあまりにも近づいたため、敵潜は完全に死角内に入り射撃不能となった。いまや残された手段は爆雷投下あるのみ。この宿敵を仕止めうるか……？

敵潜は完全に機先を制され、まったく手も足もでないというところ。ただ潜ることだけが彼らに残された唯一の手段でもあるかのよう。すでに距離は二十メートルか？それ以内か？

みりい丸が大きく左舷に傾ききったとき、敵潜はちょうど船橋の真下にあるように見え、右舷に傾斜するとき船底で押しつぶすことが出来るかと思われた。敵潜の司令塔もわずかに水面下に没している。船橋見張員は全員右舷翼に仇敵を見んものと鈴なりに集まった。ある者は足を踏みならし、ある者は腰板を叩きながら喚いた。

「ざまァ見やがれ！バカヤロー！」

「思い知ったか！畜生ッ！早くくたばれ！」

このとき、すかさず船長の命令が出た。

「取舵一杯ッ！」つづいて、「爆雷投下急げェッ！」

いままで面舵一杯にグッと力をこめて抑えられていた舵輪は、操舵手の、「取舵一杯！」の復唱とともにクルクルと左に急回転していった。まもなく舵が効きはじめたとき、敵潜は最後の気泡を大きく水面に残して、みりい丸の中央部右舷側スレスレのところで潜航した。同時に、

「爆雷投下開始！」

後部爆雷斑からブザーのひびき。つづいて二発目、三発目とたてつづけに投下された。ちょうど、敵潜が船尾真下付近にいる時機をねらった必殺の爆雷投下だ。

私たちは爆雷が炸裂するとき、敵潜のバラバラになった残骸が水中から吹きあがってくることを胸をふくらませて期待した。爆雷の炸裂をいまやおそしと、全員かたずをのんで後方海面を見守るうちに轟然、海を揺がして炸裂。みりい丸の船体はプルプルと胴震いした。同時に、

「やったァ！」と、船内に歓声が起こった。

つづいて二発目、三発目と海中を轟かせて爆雷が炸裂し、そのたびに、歓声があがった。

なんともいえぬ痛快な気分であったが、果して敵潜を仕止めえたか？爆雷の轟音とともに、海中を走る稲妻状の閃光を見た人は多いが、敵潜の船体の一かけらさえ見た人はなかった。

みりい丸が敵潜を発見してから最後の爆雷を投下し終わるまで、わずかに三分か四分の時間だった。体当りこそ達成できなかったが、最後に投下された爆雷は敵潜にとってまさに決定的な打撃となったのではなかろうか。時化の暗夜で成果を確認しえなかったのはかえすがえすも残念であったが、たとえ撃沈しえなかったとしても、あれほどの至近爆雷だったのだから、恐らく相当の損害を与えたと考えられる。

（以下略）

対空戦闘

筆者は靖川丸の一等航海士である。この船は高射砲六門と高射機関砲八門を装備し、陸軍の高射隊が搭乗していた。

翌朝八時、当直がすんでまだ朝食もすまないうちに、果然第一回の空襲だ。B17約二十機。

私はマニラでつくった一番いい白服を着て、ブリッジにかけあがった。どうせ死ぬならブリッジでという気持からである。

敵機は二手にわかれて本船と長良丸に襲いかかってきた。かたまっては危いので、両船はさっと左右に開く。防空隊もここを先途と応戦する。

はじめての洋上空襲だ。どう回避したらいいか、あわただしいブリッジで私と船長と議論だ。

「爆撃針路を直角に横へ逃げればいいですよ」

「いや、爆撃針路と平行に正反対に逃げるんだ。これだと船の巾だけはずれたら一つも当たらない」

「そのかわり、もし当たったら全弾命中ですよ」

結局その中間をとって、敵機が爆撃針路に入ったら、その針路に四十五度の角度でつっこむことにした。

太陽を背に編隊を崩さず、頭上に殺

到する敵機を全速で避ける。敵機は爆弾のなくなるまで爆撃をくりかえし、約三十分後、モレスピーにもどっていった。船団は被害なく、敵もまた一機も落ちなかった。

十時ごろ、第二回目の空襲。やはりB17で二十数機だ。苦斗三十分、こんどもお互に戦果なし。

十二時、第三回目の空襲。モレスピーまでもどって、燃料、爆弾を補給してくるのにだいたい二時間かかるらしい。

敵機は高射砲が当たらぬとなめたのか、八百メートルくらいに高度をさげて、あらしのように頭上に殺到する。こちらも必死に操船しながら、頭上の敵機を双眼鏡でにらむ。飛行機のうしろに赤いものがポロポロと出たかと思うと、まもなく爆弾特有のヒョロビョロという音をたてて、船尾付近の海上に数十メートルの水柱をたてる。まったく食うか食われるかの死斗だ。だが第三回も引きわけに終わった。

もうこれで終わりかと思ったが、しつように、こんどは少しおくれて午後二時半、第四波が襲来した。新手の双発機ノース・アメリカンB25が三十数機。「またか」と武者ぶるいしてブリッジにかけあがる。

十四時四十五分、三度目の爆撃をうまくかわしたとき、ブリッジのうしろで音もなく猛烈な水柱があがった。至近弾かと思って、ブリッジから三番ハッチまでかけおりると、「機関室浸水」という叫び声が聞こえた。爆弾はあいていた三番艙から油艙のなかへ飛びこみ、機関室との隔壁と船底を裂いたのだった。ブリッジに吹きあげた水はこのタンクの清水だった。

エンジンの動きはパッタリ止まり、船足はみるみる落ちた。乗船部隊から「大発（大型発動機艇）をおろせ」といってきたが、心臓をやられ、ウィンチが動かなくてはどうにもならない。動力なしでおろせるのは救命艇だけだ、とりあえず二隻の救命艇をおろした。

この一発で本船は死命を制せられた。だが、もう十メートル前だったら、船橋楼の下にかくれていた兵隊、船員数百人が吹っ飛ぶところだった。また、もう十メートルうしろだったら、そこはエンジン・コーターで、やはり二、三百人の兵隊がかくれていた。二番、四番ハッチだったら、そこには弾薬があって爆発、火災はまぬがれなかったろう。兵隊、船員合わせて千六、七百人乗っているところへ、直撃弾をくって、戦死者ただ一人とは、まったく幸運だった。

日の暮れぬうちに、二百名の防空隊は長良丸に移乗した。前の年の十一月からちょうど一年、生死をともにしたのだが、ついにお別れだ。この間、一機も撃墜してみせてくれなかったことがお互に残念だった。

兵隊が去って船内はヒッソリとした。一人ブリッジにあがって海図を見た。やられた位置は南緯七度八分、東径一四九度三五分。風はなく寂として静かだ。遠く五十浬の彼方に、ニューブリテン島がみえる。

船は機関室に浸水しただけで沈む心配はない。長良丸が曳航するというが、まごまごしていると、こんどは潜水艦に長良丸ともやられてしまう。ラバウルから護衛艦あて指令がきた。

「靖川丸は砲撃にて処分し、長良丸のみラバウルに帰投せよ」

そこで長良丸と「鴻」が出発し、「鵜」だけが残った。南海では、いきなり空があけて明るくなり、陽が入るといきなり闇がやってくる。本船もとつぜんその暗闇につつまれてしまった。残っていた船員の第一陣五十名が救命艇で「鵜」に移乗した。（中間略）

全員、「鵜」に移乗すると、本船は砲撃して沈めるという。私は砲術長に、「船首か船尾のマストの根元をねらったら、あそこには弾薬が入っているから火事になりますよ」といった。

暗やみに大きくドッシリと浮かぶ本船目がけて右舷から十二センチ砲三門の二斉射。まずブリッジの下の私の室あたりからチョロチョロ炎のあがるのが見えた。次に左舷にまわって同じく二斉射。合計十二発の砲弾を打ちこんだまま、長良丸のあとを追った。沈没を見とどけなかった本船には、私はいつまでも未練が残った。

この長良丸も十日後のソロモン海戦で沈没した。かろうじて四隻の補給船団――宏川、鬼怒川、山月、山浦――がガ島にたどりついたが、海岸で撃沈された。かりに本船がラバウルに戻ることができたとしても、所詮助からなかったろう。

ラバウルで私たちは転々と停泊船を泊り歩いた。だが、ラバウルだからまだよかったのだ。ガ島に上陸した船員たちは最も悲惨だった。兵隊にさえ不足する食糧不足のなかで、空しく餓死していったのである。三ヵ月後の転進の際、上陸部隊は三万のうち四割の一一、七〇六名は生還したが、宏川丸船員五十四名中、生ける屍となって助けられたのは四名にすぎなかった。

（以下略）

日露戦役百週年の節目にあたり
本戦役における輸送船の遭難

日露戦役中に敵の攻撃により沈没した輸送船は四隻で、今次大戦と比較にもならないが、百週年に因んで少し触れてみる。後世にまで語り継がれ　碑が建てられたのは常陸丸なので、それについて述べる。

常陸丸（六、一七二屯）は近衛後備歩兵第一聯隊本部及び第二大隊（第八中隊欠）、第十師団の糧食縦列を搭載し、37年6月15日玄海灘航行中午前10時頃、沖ノ島付近に敵艦三隻（ロシヤ、グロモボイ、リユリツク）を霧の裡に発見し、監督将校海軍中佐山村弥四郎は船長に命じ遁走させるとともに秘密書類を焼却した。ところが忽ちにして敵艦は射撃を開始しその勢は熾んで死傷続出し、山村中佐も敵弾に倒れてしまった。船長ジョン・ガンベルは一意遁走をはかったが、彼もまた敵弾に倒れ、その他機関長、一等運転士（共に英国人）も倒れてしまった。

輸送指揮官須知源次郎歩兵中佐は、船員の首脳を失いもはやこれまでと、先ず旗手大久保正少尉をして軍旗を焼却させた。このとき一兵卒が軍旗を捧持して単身海を渡り本土に行くことを申し出たが、須知聯隊長は途中で敵手に陥ることを虞れて許さなかった。そして、余は軍旗と運命を共にし永久にこれを守護す、諸子は脱出に努め生還出来たらこのことを伝えよと言った。そして重要書類を焼却させ、自ら軍旗を裂き、大久保少尉は旗竿を折り火に投じ、焼き尽きるのを見て自刃した。

第二大隊長山県俊信以下将校及び同相当官は自刃または敵弾に倒れ、海に投じ魚船に助けられたり、浮遊物に縋り陸地に辿りついた者は下士卒一三三海軍水兵一、傭夫、船員一七だった。

この碑はもと九段下牛ヶ淵にあり、戦後地中に埋めてあったのを掘り出して現在は靖国神社境内に建っている。

本船は午後三時頃機関部より火災起り船尾より沈没した。その頃風雨激しかったが、たまたま一隻の漁船が航行し、船の乗員三七名を救助した。戦死者は一〇六三名だった。公刊戦史には戦死した将校、同相当官、高等文官の名が載っているが全部で二八名、中に勅使という肩書きの人がいる。

常陸丸
（偕行社発行雄叫軍歌集より）

一、波おだやかに風絶えて
　立つ霧くらき玄海の
　波路はるかにさしかかる
　わが運送の常陸丸
二、乗り組む七百有余名
　皆これ干城貔貅（ひきゆう）の士
　敵と雌雄を決せんと
　勇気誰かは劣るべき
三、俄かに轟く砲声は
　ただごとならず聞くうちに
　敵艦たちまち現われて
　撃ち出す弾丸は雨霰
四、降（くだ）れと敵は勧むれど
　われには樹つべき白旗なし
　死すとも引かず退かぬ
　日本男子を知らざるか
五、弾丸われに命中し
　機関は砕け火は起こり
　流るる血汐ともろともに
　屍は算を乱したり
六、腰には剣帯ぶれども
　手に手に銃は握れども
　船その船にあらざれば
　戦われぬぞ口惜しき
七、「今は是まで死すべし」と
　決して騒がぬ須知中佐
　捨つる命は軽けれど
　聯隊長の任重し
八、「残して敵に渡さじ」と
　手ずから火に焼く聯隊旗
　炎は煙と消ゆれども
　赤誠いかで消え失せん
九、数万の敵を取りひしぐ
　勇気を施すところなく
　運命船と共にして
　殉ぜし七百余名の士
十、沈みし屍も還らねど
　壮烈鬼神を哭かしめし
　最後は日本軍人の
　鑑とあらん千代かけて

上村将軍

佐々木信香　作詞
佐藤　茂助　作曲

日露戦争の初期、ウラジオ艦隊（グロムボイ、ロシア、リューリックの三巡洋艦を基幹）は4月に金州九を、6月に常陸丸を撃沈し、7月には太平洋まで進出して商船を攻撃するなど傍若無人の行動であった。後方保安の任務に服していた上村彦之丞中将の率いる第二艦隊（六隻）は、これをなかなか捕捉し得ず、会敵すれば霧に妨げられるなど思う

ようにいかず、ために世人の非難は轟々たるものがあったが、8月14日、蔚山沖で遂に捕捉、二集を大破し、リューリックを撃沈した。

一、荒浪吠ゆる風の日も
大潮むせぶ雨の夜も
対馬の沖を守りつつ
心を砕く人や誰
天運時をかさずして
君いくたびかそしられし
ああ浮薄なる人の声
「君睡れり」と言わば言え
夕日の影の沈むとき
星の光の冴ゆるとき
君海原をうち眺め
偲ぶ無限の感いかに

二、時しも八月十四日
東雲(しのめ)白む波の上
煤煙低く棚引きて
遙かに敵の影見えぬ
勇みに勇む丈夫が
皮肉は躍り骨は鳴る
見よやマストの旗の色
湧き立つ血にも似たるかな
砲声天に轟けば
硝煙空に渦まきて
茜(あかね)さす日もうち煙り
荒るる汐(うしお)の音高し

三、蔚山(うるさん)沖の雲晴れて
勝ち誇りたる追撃に
艦隊勇み帰るとき
見よ沈み行くリューリック
恨みは深き敵なれど
捨てなば死せん彼らなり
英堆はらわたちぎれけん
救助と君は叫びけり
折りしも起こる軍楽の
響きとともにとこしえに
高きは君が勲なり
匂うは君が誉れなり

蔚山沖海戦補遺

折しも第二艦隊は、旅順艦隊の出撃を支援するため朝鮮海峡へ向け出撃したウラジオ艦隊を、八月一四日朝、蔚山沖において発見し、ここに念願の砲撃戦が開始された。第二艦隊の巡洋艦出雲・吾妻・常盤・岩手はウラジオ艦隊に並走しつつ砲撃戦を展開した。戦闘五時間、ついにリューリックは沈没、この間、ロシアの他の二艦は行動不自由なリューリックを守ろうと三、四度反転攻撃をしてきたが、大損害を被り、ついにウラジオストックに逃走した。

砲弾欠乏の報告を受けたため追撃を断念した上村長官はロシア兵の救助を命じ六二六人を救助した。ここにウラジオ艦隊は事実上、壊滅し、連合艦隊は挙げてバルチック艦隊の邀(よう)撃に専念できることになった。

対馬丸の悲劇

今次大戦で数多ある輸送船の海難で最も心の痛むのは対馬丸である。

昭和19年7月7日、政府は沖縄方面に敵の侵攻あることを予期し、南西諸島の幼老婦女子を疎開させることを決定し、所要の地方に通達した。それによれば沖縄県から九州に八万人、台湾に二万人計十万人を疎開させるという計画で、その費用も計上された。

それを受けて沖縄県では現地軍と協議し、なるべく早く実現しようと努力したが、十万人の疎開は出来ず、19年7月から20年初までに延べ一八〇隻をもって七万人を疎開させた。県では全県民が玉砕しても、子孫を後世に残さねばならぬと、優秀な教師と学童の疎開を優先した。

19年8月21日、学童、一般あわせて一六六一名を乗せた対馬丸（六七五四屯の貨物船）は、暁空丸、和浦丸と船団を組んで、那覇港を秘かに出港した護衛艦は宇治、漣二隻の駆逐艦だった。

船団は翌22日午後10時頃悪石島（鹿児島県大島郡十島村）西北約一三粁を航行していた。10時12分対馬丸は敵潜水艦の雷撃を受け、火柱を吹き上げわずか十一分で海面から姿を消してしまった。他の二船は急いで散開せざるを得なく、護衛艦は爆雷を投下し二船を守った。対馬丸乗船者千六百余名中学童は約八百名で、救助された者は僅か五十九名に過ぎなかった。氏名の判明している亡き学童は七百五十名で靖国神社に祀られている。（以上主として金城和彦著「嗚呼沖縄戦の学徒隊」に拠る）

日露戦争百年の節目にあたり この戦争間に見る特攻精神①

田中　賢一

日露戦争当時は今次大戦末期に劣らぬ程の国家存亡の関頭にあったが、統帥は健全で、計画的な特攻作戦などはなかった。しかし第一線の将兵の中には、特攻隊と変わらない精神で行動した事例は沢山ある。その事例を今回と次号で紹介する。

先ず永沼挺進隊の小堤辰次郎少尉について知ってもらい度いと思う。

明治三十八年一月、沙河対陣の末期になるが、満洲軍の最左翼を守っていた秋山支隊（騎兵第一旅団秋山好古少将の指揮する部隊）から騎兵第八聯隊長永沼中佐を長とする二個中隊の部隊が派遣された。その任務は敵後方の鉄道破壊だった。

永沼挺進隊は一月九日壮途に就いた彼我対峙している西方を大きく迂回して、二月十一日夜半、奉天北方約二五〇キロにある新開河の鉄道橋の爆破に成功した。その時小堤少尉は爆破作業班長として橋脚に装填した爆薬を最後まで点検し、爆破を確実にしたが、敵守備隊の射撃を受け頭と背中に重傷を負った。扶けられて手馬の場所まで戻ったが、馬に乗ることが出来ず、挺進隊の前から追尾していた砲を持つ敵の騎兵に対し、永沼隊長は断固攻撃の決心をした。ここに日露戦史上有名な張家窪子の乗馬戦となるのだが、攻撃すると聞き、それまで馬車の上で呻吟していた小堤少尉は、従卒に命じ自分の馬を持って来させ、戦闘に参加しようとした。乗馬したが出血多量で体力衰え、騎座が締まらず落ちそうになるので、鞍に体を縛りつけさせ戦闘に参加した。

張家窪子の部落の中には数倍の敵騎兵がいたが、隊本部と中屋中隊は右に迂回し、砲を有する敵の中に突入し、小堤少尉の属する浅野中隊は、正面の土塀を飛び越え部落内に突入した。そこには約二百騎の敵が槍を構えていたが、小堤少尉は真先の敵中に切り込んだ。頭に捲いた白い包帯は夜目にもはっきり見え、味方を奮い立たせた。混戦乱闘の末敵は敗走したが、浅野中隊長以下十六名が戦死し、小堤少尉も四個所槍傷をうけた。

挺進隊は敵の砲一門を奪い数倍の敵を敗走させたが、全部で戦死十八名負傷者四四名を出し、隊として戦力を喪失してしまった。そこで十七日長林子に後退し、ここで再編成し小部隊ごとに分れ、敵の通信線の破壊や糧秣集積所の焼夷等を行うことになった。

三月五日大蘭営子に拠点を設定し、負傷者を残し分進するのであるが、出発にあたり永沼隊長と小堤少尉との問答を、及川中尉（中屋中隊の小隊長）の手記には次の通り出ている。

永沼中佐「挺進隊はこれから再び鉄道爆破に出かけるが、お前たちの為には充分看護や護衛に手落ちのないよう人員を残しておくから、安心して療養を加え早く治るようにせよ」

小堤少尉は顔色も憔悴し両眼に涙をたたえて聞いていたが、如何にも残念そうに例の切口上で幾度か途切れ途切れに「隊長殿何ですか、私共はこのお国の大事に生きて還ろうなどとは思っておりません。恐らく挺進隊の皆の心は同一だと思います。負傷者も病人も最後まで行動を共にすることの出来ないのを憾みこそすれ、看護や保護を望む者は一人もおりません。苟くも手一本でも足一本でも働き得る者は皆出かけて行って下さい。私共の為に健康な者一人でも残っていたとあっては私共は死んでも目を閉じることは出来ません。患者のことなど考える時期ではありません」

言々悲壮とはこの事だろう。時々歯ぎしりしながら伝わる涙と共にこの断末魔の熱誠溢るる言葉には一座皆粛然襟を正し嗚咽あるのみだった。隊長亦無言嗚咽あるのみ。

小堤君はその後遥か東方に殷々たる砲声に胸を躍らせながら、興奮漸次熱が高まり遂に意識を失うに至りしこそ遺憾なれ。絶えず「監視兵はどうした」「早く射撃しないか」「早く出ろ出ろ」などと口走りながら、昏々三月十日ころ未だ各分進隊も帰らず奉天の捷報も耳にすることなく、数多の戦友の看護を受けながら幽明境を異にするに至りしことこそ遺憾なれ。

（及川虎彦著永沼挺進隊回顧）

小堤少尉

広瀬中佐に代表される旅順港閉塞作戦

広瀬中佐　文部省唱歌

一、轟く砲音　飛来る弾丸
荒波洗う　デッキの上に
闇を貫く中佐の叫び
杉野は何処　杉野は居ずや

二、船内隈なく　尋ぬる三度
呼べど答えず　探せど見えず
船は次第に　波間に沈み
敵弾いよいよ　あたりに繁し

三、今はとボートに　移れる中佐
飛びくる弾丸に　忽ち失せて
旅順港外　恨みぞ深し
軍神広瀬と　その名残れど

昔なら子供でも皆知っていたこの歌とその史実。それと神田須田町にあった広瀬中佐と杉野兵曹長の銅像。今の世に忘れ去られてしまったことだが、日露戦争にも特攻隊はあった。

汽船を沈め旅順口を閉塞しようとする作戦は三回行はれた。各回の指揮官船名、搭乗人数は、

（第一回　三十七年二月二十三日）

天津丸　有馬良橘中佐以下一七名
報国丸　広瀬武夫少佐以下一六名
仁川丸　斎藤七五郎大尉以下一六名
武陽丸　正木義太大尉以下一六名
武州丸　烏崎保三中尉以下一四名

士官は各船指揮官のほか機関科一名がついていて、これは予め人選してあったが、下士官兵卒は作戦実施が決定してから募集したところ、二千余名が志願し、中には血書志願した者もあったが六七名を選抜した。選出母隊は全艦艇に及んでいる。

（第二回　三月二十六日）

千代丸　有馬良橘中佐以下一八名
福井丸　広瀬武夫少佐以下一八名
弥彦丸　斎藤七五郎大尉以下一六名
米山丸　正木義太大尉以下一八名

今回は四隻で指揮官は第一回と同じで、更に指揮官付として士官一名が付いた。下士官兵は新に募集することになり、第一第二艦隊より志願者数千名のうちから五十余名を選抜した。なお下士官兵の大半は機関科の者である。

第三回は更に拡大し、一二隻をもって五月三日実施したが、紙面の都合で細部は省略し、広瀬中佐が戦死した第二回について戦闘の様相を述べる。

三月二十六日夜閉塞船隊は駆逐隊、艇隊に掩護せられて前進し、翌日午前二時老鉄山南方に達し、これより千代丸、福井丸、弥彦丸、米山丸の順序で港口に進航した。この夜薄い霧がかかりおぼろ月だったので、速度を増して突進したが、三時三十分先頭の千代丸が先ず敵に発見され、哨艦及び陸上砲台が一斉に射ち始めた。弾丸忽ち乱れ飛び、探照灯に目が眩み前方は見えないが、各船の指揮官は船橋に立ち部下を励ましいよいよ前進した。千代丸は港口を目指していたが探照灯でよく見えず、黄金山下の海岸に近い水道の入口において、船首を陸に向けて投錨して爆沈した。

二番船福井丸は千代丸の爆沈するのを見て、その左に出て投錨しようとした時、敵駆逐艦より発射した水雷が命中し船底が裂け、同時に起きた自爆の声とともに浸水し、千代丸の左前方に沈没した。

三番船弥彦丸も福井丸の左に出てこれと並んで爆沈した。やや遅れていた四番船米山丸は港口に近付いたとき、敵の駆逐艦が航路を横切ったのでその艦尾を擦り、千代丸の右に進入し、弥彦丸の左に航路の余裕があるので、直に左転し水道の中央と覚える所に出て投錨したが、船は惰力により錨を引摺りなおも航進した。そのとき敵の魚雷が命中し灯台直下に沈没した。

各閉塞船は沈没終わるや隊員は端舟に乗り沖合に出たが、敵は更に砲火を端舟に注ぎ機関砲や小銃を乱射した。これより先福井丸指揮官広瀬少佐は、該船を爆破せしめ乗員を端舟に移し、人員を点呼してみると爆破薬点火の為船倉に下りた上等兵曹杉野孫七が居ないのを知り、弾雨を冒しその名を呼びつつ船内を一巡し、端舟に戻ったが見えないので、再び尋ね三度もとめたが見あたらない。船はますます沈み海水甲板を洗うに至り、このままでは船の沈没に端舟が引き込まれるに至るので己むを得ず端舟に移り沖合に向ったとき一弾飛び来って少佐を奪い舟中には一肉片がとどまるのみだった。

閉塞作戦は更に一回行ったが、完全に閉塞することは出来なかった。しかし令名は後世にまで語り伝えられた。

広瀬少佐

広瀬中佐と杉野兵曹長の銅像
神田須田町の交差点に在った

今期の戦史 ⑥

ガ島の攻防 (2)

前号で一木支隊（歩兵第28聯隊長一木大佐指揮の一個大隊基幹）の攻撃が頓挫して一木支隊長以下が戦死し、一木支隊の残部及び川口支隊は船団輸送が出来ないので、駆逐艦による鼠輸送によらなければならなくなったことまで述べた。川口支隊とは歩兵第35旅団長川口少将指揮の一個聯隊基幹の部隊である。

8月30日から9月4日の間一木支隊の残部、川口支隊主力、青葉支隊の一部は鼠輸送により上陸した。青葉支隊とは第2師団歩兵団長那須少将指揮の歩兵第4聯隊基幹の部隊で、うち一個大隊は川口支隊に配属された。

川口支隊はジャングルを潜行し、12日夜攻撃準備位置に到着し、夜襲を行ったが不成功に終わり翌13日再興、一部敵陣を奪取したが戦力つき後続を待つことになった。

次に投入されたのは第2師団である川口支隊の弱体なのは鼠輸送による物的戦力の乏しい為とし、聯合艦隊の総力を挙げて支援し船団輸送を強行した10月13日夜戦艦金剛と榛名は敵飛行場に約1時間10分に亘り35糎砲弾を浴びせ、火の海と化せしめた。翌14日夜にも巡洋艦2隻による艦砲射撃を実施し、この間輸送船団は14日昼間2回にわたり敵機の妨害を受けたが、その晩第2師団の歩兵第16聯隊及び第38師団の歩兵第230聯隊を含む輸送部隊の全部の上陸は成功した。しかし弾薬糧食の大半の揚陸は敵機の攻撃により不成功に終わった。

その後聯合艦隊は、17日夜巡洋艦と駆逐艦をもって残りの部隊を輸送し、これで第2師団の上陸は一応終わった。

第2次総攻撃の失敗

第2師団は一木支隊や川口支隊も指揮下に入れ、24日夕飛行場に対し攻撃前進を開始したが、豪雨に見舞われジャングルの中で行動は不能になった。21時過ぎに一部の部隊は突入したが、敵の火力に阻止されて成功しなかった。翌25日夜予備隊も投入し攻撃再興したが、那須歩兵団長はじめ両歩兵聯隊長や大隊長以下の戦死が多く、攻撃は失敗に終わった。

南太平洋海戦

聯合艦隊は第2師団の攻撃に期待して決戦を企図し、24日行動開始、空母各1を基幹とする3群の敵艦隊に対して、3次に亘り航空攻撃を加え、我が方も瑞鳳が損傷をうけたが、敵に大打撃をあたえた。米軍の記録によれば、沈没空母(ホーネット)、駆逐艦1、損傷空母1、戦艦1、巡洋艦1、駆逐艦各1に損傷を受けたが沈没はなかった。

大本営は第2師団の攻撃が頓挫したが、ガ島奪回の方針は堅持していた。

第38師団の戦闘

第2師団の次に上陸したのは第38師団である。この師団の歩兵第230聯隊は、10月15日上陸し第2師団に配属されていたが、次いで歩兵団長の指揮する歩兵228聯隊が11月5日駆逐艦で上陸した。師団主力は15日輸送船で到着したが敵の砲爆撃で大損害をうけ、人員2000、野山砲弾260箱、米1500俵を上陸し得たのみであった。上陸できた部隊は歩兵約1大隊、工兵聯隊及び輜重兵聯隊の各主力だった。

これらの間に第3次ソロモン海戦が行はれ、我が方は戦艦2、重巡1、駆逐艦3を喪った。敵艦艇の損害は米軍の記録によれば沈没、巡洋艦3、駆逐艦7、損傷、戦艦1、巡洋艦2、駆逐艦4となっている。なおガ島攻防の海軍作戦については後で取纏めて述べる。

第38師団が加ったもののすでに攻勢を取りうる戦力はなく、補給続かずガ島転じて餓島となり、やがて全面撤退となるが、これも海軍関係の項に含め後で述べる。

特攻隊に劣らぬ戦例

後から戦線に加った第38師団の部隊は、やがて攻勢に転じうる態勢に成り得ると信じ、アウステン山一帯の陣地を固守していたが、熾烈な敵の砲撃を封ずるために挺進攻撃を企図した。

第38師団長は28日に工兵第38聯隊長岩淵經夫中佐に対して、一小部隊をアウステン山方面から敵陣地に潜入させ、敵の砲兵もしくは後方施設等を破壊攪乱するよう命令した。

聯隊長岩淵中佐は第2中隊から**中澤勲少尉**を、第3中隊から**寺澤孔一少尉**を選抜し、それぞれ部下4名を指揮して挺進斥候となり、前記の任務を遂行すべきことを命じた。

両斥候は12月6日アウステン山を出発、約10日間でおのおのその目的を完全に達成し（中澤挺進隊は西飛行場の飛行機2、大型給油自動車2、照空灯1を爆破炎上、寺澤挺進隊は砲兵陣地1、幕舎2を爆破）、敵に多大の脅威を与えて、寺澤挺進隊は14日、中澤挺進隊は15日全員無事帰還した。

さらに、第38師団司令部附大野廣司中尉を長とする大野挺進隊（長以下3

名）が編成され、12月15日米軍の指揮中枢を擾乱する目的で出発したが、同挺進隊はついに1名も帰還しなかった。

「米公刊戦史」に、「12月12日、日本軍の夜襲部隊がガ島第2戦闘機用飛行場滑走路に潜入して来て、P―38 1機及びガソリントラック1台を破壊した」とある。中澤挺進隊の戦果と判断される。

後に続く者を信ずと言い残して死んだ若林東一中隊長

この言葉は特攻隊員の心の寄りどころとして屡々使はれたが、初めて言ったのはこの人である。若林は山梨県身延の生まれ。中学卒業後小学校の代用教員をしていて、徴兵で入営し下士官を志願し、教導学校を優等で卒業して軍曹になってから、士官学校を受験し入校し、52期で卒業時は恩賜だった。

38師団の歩兵第228聯隊で任官し、大東亜戦争緒戦の香港攻略時、九龍半島要塞の主陣地に尖兵中隊長として接触した。敵陣地の要衝が手薄なのを看破し、独断突入奪取してしまった。聯隊長はその報告を聞きこれまた独断攻撃を開始し、砲兵の攻撃準備射撃を行ない、1週間かけ行う正攻法の要塞戦を計画していた第23軍を慌てさせたが、わずか3日で堅固な九龍要塞を奪取してしまった。

ガ島では若林の率いる歩兵第228聯隊第10中隊は、見晴台と名付けた拠点を占領していた。彼は苦しい戦のうちにも日記をつけていた。またこの中隊の属する第3隊大隊長西山遼少佐の手記も残っているので、それによって若林の人物を偲んでみる。

この大隊の各中隊はそれぞれ拠点を占領していたが、その戦い振りを西山大隊長は書き残している。

我ガ第一線将兵ハ既ニ敵ノ戦法ヲ心得、敵優勢ナル空中勢ト火砲ヲ恃ミ猛砲爆撃下ニ一歩一歩我陣前ニ進出シ来ルモ敢テ相手トセズ、ソノ砲爆撃ノ集中間ハジット我掩壕中ニ満ヲ持シテ待ツ。集中射撃中止スルト見ルヤ、忽チ敢然トシテ壕外ニ出テ、手榴弾ト狙撃ノ奇襲、米兵ハ忽チ算ヲ乱シテ狼狽シ泣声ヲ立テツツ逃ゲ惑フ。

米兵ハ毎日カクノ如キ攻撃ヲ三回四回ト繰リ返スモ、常ニ我守兵ノ一撃ニ悲鳴ヲ挙ゲツツ潰走ス。強キカナ我ガ第一線。

戦えばこのようだが糧食の欠乏は如何んともし難たかった。若林の日記には次の通りある。

飯――実に飯が欲しい。うまいものを兵に腹いっぱい食はせて、満足して戦ふ姿を見度い。そればかりが念願だ。たとえ迫撃砲がスコールのやうに落ちようが、爆撃で地を耕やされようが、恐れはせぬ。兵が青くやせていくのが見てゐられない。（十一月十日）

それでも彼は屈しなかった。西山大隊長に送った年頭の辞にいう。

ガ島第一線ニ新春ヲ迎フ。正ニ必勝ノ元旦ナリ。謹ミテ聖寿ノ万歳ヲ寿ギ奉ル。

我ガ中隊、本朝一粒ノ食ナキモ士気極メテ旺盛ナリ

水筒ノ水ハ滾々トシテ活力ノ泉トナル

既ニ生死ナク任務ハ重シ

若林第一線ニ在ルカラハ　願クバ御安心ヲ乞フ

元旦や糧なき春の勝戦

昭和十八年元旦

於見晴台第十中隊長若林東一

西山部隊長殿

西山大隊長は若林中隊長の指揮振りについて次のように述べている。

食なく、弾なく、兵は日と共に栄養失調となり、マラリヤに呻吟し、第一線に銃とるもの各陣地一、二名、歩哨監視兵も既に出すことが出来ぬ現状だ併し若林は任務は重し、この見晴山を守る為には、一日でも一時間でも長くこの地を守る為には、飽くまで積極的にやらねばならん「防禦は克く攻勢の鋭気を包蔵し、必ず主動の地位を確保せよ。陣地は死すとも敵に委すこと勿れ」という戦陣訓の訓は彼の信念だった。

傷つき痩せ細った兵に、尚厳然として、斥候の任務を、敵陣地奇襲の重任を課していったが、この場合彼は決してそのまま放任はしなかった。この持久防禦の重大な時、一兵と雖も失ってはならないのだ。彼は斥候に、奇襲隊に、任務を課する毎に、自らこれを指導し、之についてマタニカウ河まで行った。そして「あの陣地だ、あの敵の有無を見て来い」「あの陣地だ、あの敵の有無を見て来い」「あの川の曲がり角から上って、あの突角の敵の有無を見てこい」と指導した。部下は自信と

靖国神社遊就館展示

勇気に、そして隊長の為ならばと、弱り果てた肉体に鞭打って奮闘した。

12月中に揚陸した糧秣は、十分の一の定量で、17日には断絶するに至り、六分の一定量で前線に敢闘していた部隊は、23日になると一部は完全に絶食するのやむをえない状態となった。西山日記はよく大隊長の心境を伝えている。

糧秣補給ノタメ駆逐艦入泊セルモ月明ノタメ揚陸作業困難ニ陥リ引キ返ス当分揚陸不可能トノ事ナリ。揚陸成功ノ通報今マデ屡々受ケタルモ、総テ一時ノ気休メナリシカ。

現在保有量ヲ以テ本月末マデ喰ハス如クセヨトノ命ナリ。無茶ト云フヨリ最早云フベキ事ヲ知ラズ。シカシ戦況非ナリ。軍司令官以下全員此ノ困苦ニ堪ヘツツアリ飽クマデ頑張リ通サザルベカラズ。

無理ト知リツツ部下ニ命ゼザルベカラザル悲痛、月下ニ各中隊長ヲ集メシンミリト語リツツ、士気ノ凋落ヲ戒メ近ク行ハルベキ攻勢ヲ待ツ鋭気ヲ包蔵スベク徹底ヲ要望ス（十二月十八日）

この大隊長の話を聞いた第一線の若林中隊長の日誌は更に簡単である。

来る二十一日より三十日まで輸送の途絶ゆるとの宣告なり。絶食の状態なり。（十二月十九日）

それでも若林はなお屈することがないのは、先に掲げた大隊長宛ての年頭の挨拶に見る。しかし彼も不死身ではなかった。1月12日の西山大隊長の日誌には「若林中尉重傷の報来る」とある。そして14日に戦死しているが負傷の状況など詳かでない。後に続く者を信ずとは、この時言い残した言葉と伝えられている。

同期生若林東一

田中　賢一

彼とは兵科も違うし予科本科とも同じ中隊だったことがないので、話したこともない。ただ軍曹で入ってきて唯一の明治生まれの同期生、ということは予科のころから聞いていた。（我が期の平均は大正七年生まれだが、彼は明治四十五年生まれ）

本科の時よく中隊対抗の棒倒し競技が行われた。私は一中隊だが二中隊が相手の時、先頭切って突進して来るのが若林だった。彼は防禦している者の肩を踏み付け、棒に登ろうとする。こんな奴に登られてはたまらないから、引きずり下すのだが、大声で吠えながら向かってくる闘志のかたまりのような男という印象がある。彼の中隊ではターザンという渾名だったと聞く。

彼と予科了り共に士官候補生として歩兵第34聯隊（静岡）に配属された小田という男がいる。既に故人だが若林について書いた一文がある。但し小田は本科卒業と同時に航空通信に転科したので、両者が一緒にいたのは士官候補生の頃だけである。

我々は長兄のような彼をターザンと呼び、気軽に同年扱いしたが、彼は同期生は遊んでやる友達ばかりで、共に遊び共に語る友達はいなかったようだ。同年の人は45期の大尉である。そんなことで予科以来孤独だった。

私は任官後静岡を訪ねたことがある。その時彼は扇花という芸者を傍らに侍らせて豪快に飲んでいた。これは聞いた話だが、静岡の大火のとき若林少尉は作業衣を着て手兵を率い市街に進出し、大いに活躍した。火の子を浴び顔の皮がただれた。白い薬を塗って包帯した彼を「扇花の鏡台をかつぎ廻って漆かぶれした」とからかう者もいたが、別に否定もしなかったという。

15年の3月若林は歩二二八に転属となり中支に行った。この聯隊で香港、ジャワ、ガ島と転戦することになる。

左の絵は我が期の谷晃夫という絵を能くする者が、靖国神社のみたま祭に雪洞に画いて奉納したものである。谷も既に故人となった。

負傷の身を部下に扶けられ大隊長に報告に行くところと谷は言ったが、西山大隊長の日誌には報告に来たとは書いてないので、谷の想像であろう。なお谷も10加の中隊長としてガ島作戦に参加し生き残っている。

後世に語り伝えておく方法について

田中　賢一

史実を長々と書いても若い者は読んでくれない。そこでお国のため一命をささげた人達の精神を、葉書一枚に凝集しこのようなものを作り、機会あるごとに配布している。私は初期の空挺作戦には参画したが、末期の高千穂部隊（第二挺進団）のレイテ作戦や、沖縄作戦の義烈空挺隊などは、身近な人を送り出した。それらの史実を末長く日本人の念頭に留めおかねばならぬと思っている。

ここに掲げた二つの記事について若干補足すれば、レイテ空挺作戦について、第一次降下部隊が飛行場に向った後、第一次から洩れた衛生兵の毛利義治君が宿舎の壁にこの歌が書き残してあったので写しとった。この人はルソン島で戦い数少ない生還者で、すでに故人だが生前私に告げたので、世に伝えることが出来た。

高千穂部隊とは第二挺進団の通称名である。内地における我々の使用飛行場は新田原だったが、そこから西方に高千穂の峰が見えた。特に夕日が沈むころ天空にクッキリと望めた。神話による天孫降臨の聖地で、空の神兵と言われた我々には、得難い名称だった。

この面にかかげてある写真は、ある従軍カメラマンの撮ったもので、この人から沢山の写真を貰ったが、申しわけないが名前を失念した。

義烈空挺隊については、待機期間が長いので遺書遺詠は沢山残っている。写真も小柳次一というカメラマンが付ききりで撮ったので沢山ある。両方とも最も印象的な写真を採用した。

義烈空挺隊の写真は出撃日の昼頃宿舎になっている三角兵舎の中で小柳さんが撮ったもので、この人は既に故人だが、生前は慰霊祭には必ず出席していた。私はこの写真誰かと不時着生き残りの者に尋ねたが、横顔で判断できないという。小柳さんに名前を聞いて書いておいてくれたらよかったのにと言ったことがあった。

戦後六十年、当時を知るものが次々と鬼籍に入り、後世に伝えることが緊急になってきたことを痛感する。

（現物は葉書大）

花負いて空うち往かん雲染めん
　屍悔いなく吾ら散るなり
誰が残せしか
　サンフエルナンドの壁の文字

クラーク基地を発進する特攻機に
戦局の唯ならざるを知る
川南を発ちしとき　我心既に決しあり
何ぞためらうことやある

いみじくも名づけたり「高千穂部隊」
ますらをのかなしきいのちつみかさね
　つみかさねまもる大和島根を
三井甲之

挺進第３聯隊の宿舎はサンフエルナンドにあった

アンフエレス出撃前のひと時

レイテ空挺作戦
「和号」と呼ぶレイテ島東部平野に対する攻勢作戦の、先駆けとして第二挺進団が使はれた。挺進第三聯隊の主力に一部第四聯隊が加わった第一次挺進部隊は、十九年十二月六日ルソン島アンフエレス基地を発進し、夕刻レイテ島の五目標に向かった。彼我の戦力は隔絶しており、聯隊長白井少佐率いる主力以外の行動は詳かでない。最終的には全員戦死してしまった。

奥山に名もなき花と咲きたれど
　散りてこの世に香りとどめん
今村美好曹長

よしや身は千々に散るとも来る春に
　また咲きいでん靖国のみや
関　三郎軍曹

待つありて眺むる月の涼しさよ
　新妻幸雄少尉

続くものありと思へばもののふの
　道ひたすらにかけしをのこら

隊長は奥山道郎大尉

義烈空挺隊　出撃を夕刻に控え宿舎で何か書き残す一隊員

沖縄作戦のとき航空特攻を成立させるため、敵飛行場を一時制圧しようと義烈空挺隊が使はれた。20年５月24日熊本の健軍飛行場を発進し沖縄に向かった。敵航空の主飛行場読谷は翌々日朝まで完全に機能を喪失した。

高知海軍航空隊之碑と白菊特攻隊について

深堀　道義

高知海軍航空隊は、徳島海軍航空隊と共に、偵察搭乗員の練習航空隊であった。昭和二十年五月と六月に、両航空隊とも機上作業練習機「白菊」による沖縄方面に対する夜間の特攻作戦を実施し、高知空五十二名、徳島空五十六名の特攻戦死者を出している。

当協会で発行している「特別攻撃隊」には、七十余頁に亘る顕彰譜に全国にある慰霊碑、慰霊像、顕彰碑などの写真が由来記と共に掲載されている。初版は財団法人になる前の「特攻隊慰霊顕彰会」が、平成二年三月に発行している。高知空之碑の除幕式は昭和六十二年五月であるから、或いは原稿の締切りには間に合わなかったのかと思われたが、その後三版まで発行され、財団法人になって平成十五年三月に発行された四版にも収載されていないことから、協会は高知空慰霊碑の存在を把握していなかったものと判断された。

依って「高知海軍航空隊之碑」の建立について紹介し、これを機会に「白菊特攻」について、それを詳しく知っておられない会員も多いと思われるので、概略をお伝えしておきたい。

白菊特攻隊

大本営は昭和二十年三月一日を以って、陸海軍共に搭乗員練成教育を中止し、全軍特攻の方針を決定した。海軍は操縦術の九三式中級練習機（通称・中練、俗称・赤トンボ）、機上作業練習機「白菊」、及び水上偵察機による特攻を行う決定を下した。海軍は中練、白菊、水偵による特攻は、敵の本土上陸作戦時に用いる考えであったが、地上戦闘が終った後の沖縄海域に対して、この三機種による特攻を行った。

それでは敵が本土上陸を行う場合に、どのような攻撃をかけようかと考えていたかというと、高速偵察機「彩雲」が敵艦隊・船団を発見したならば、爆装戦闘機、爆撃機、攻撃機による特攻攻撃を行い、上陸用舟艇が海岸めがけて発進したならば、中練、白菊、水偵が攻撃をかけるという腹案であった。

偵察員の教育航空隊は、「白菊」のみの高知・徳島の他に、鈴鹿と大井の航空隊があり、この二隊は「彩雲」の練成も行っていた。四国にある高知空と徳島空は第十二航空戦隊に属し、三月三日、第五航空艦隊（司令長官、宇垣纏中将）に編入された。

徳島空も高知空も、その規模はほぼ同じであった。教育を受ける学生と練習生が約二千名（但し高知空は練習生のみ）、一般隊員が約千名であった。教育隊は四ヶ中隊からなり、各中隊は三十機の「白菊」を保有していた。三月一日、教育中止時に卒業資格を与えられて実施部隊に配属されたのは、第十四期予備学生と（学生は徳島空のみ）、飛練三十八期の甲飛十三期であった。（甲飛はなお飛練四十二期迄が在隊し、最後は土木作業に従事することになった。）

特攻隊員には操縦の全教官と教員、偵察は土木作業に残る練習生担当の教官、教員を除いた全教官、教員が当ることになった。高知空の戦死者で見るならば、それは兵学校七十三期、十三期予備学生、甲飛は十期から十三期、乙飛は十七、十八期、特乙の一期から四期、丙飛の十四期から十七期であった。

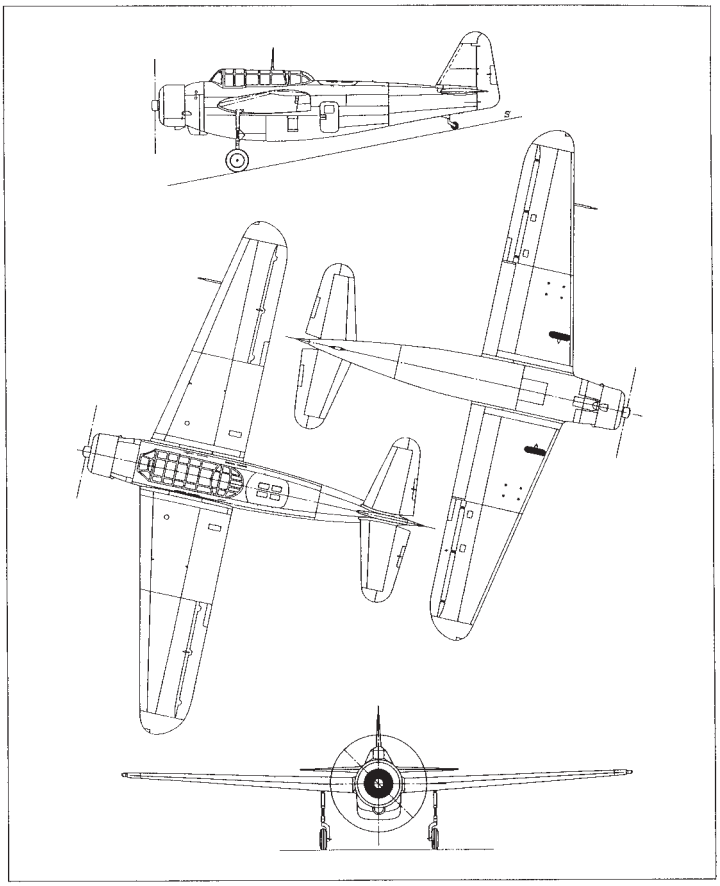
機上作業練習機「白菊」

機上作業とは偵察員に航法、偵察、通信、射撃、爆撃等の実地教育を行う練習機で、次頁の写真、図面でわかるように中翼単葉、固定脚の単発機である。前席に操縦員が一人、後席に教官（又は教員）一人、練習員三人が乗れる構造であった（改造型は練習員四人）。エンジンは五百十五馬力で、速度は九十ノットの鈍速である。

特攻用としては後室の訓練用諸設備器機を取払い、二百五十キロ爆弾を二発固定し、沖縄までの航続距離を伸ばすために、ゼロ戦の増槽を装置した。特攻機は操縦員一名、偵察員一名で、偵察員は増槽の上に跨って航法を行った。通信機も貴重品となったので、大部分の特攻機は通信機を降ろして飛んだ。

特攻隊員が決ると、操縦と偵察はペアとして固定され特攻機としての訓練に励んだ。一つは五百キロの荷重（爆弾を搭載した時の重量）を加えての離陸、もう一つは海上百メートル以下で飛ぶ訓練、これは敵のレーダー波を避けるためであり、もっと低く飛ぶことが望ましい。更には夜間、遠距離を飛ぶ航法、「白菊」は鈍速であるから編隊を組んで飛べない（一挙にまとめて撃墜される）。故に編隊長機に従って飛ぶわけにはゆかず、単機での操縦能

機上作業練習機《白菊》



《白菊》構造図　提供：酣燈社（日本海軍機より）

長符を送って来たのは二機のみであった。又沖縄に残っている地上部隊から沖に火柱を認めたとの通報があれば、それも「白菊」の突入によるものだと思うのである。昭和二十年の五月頃から、沖縄各地での玉砕が報じられる様になり、六月二十三日を以って組織的地上戦は終りを告げて、以後は残存兵による抵抗が続けられていたが、沖縄海域には多数の敵艦船が行動又は碇泊しているので、わが特攻は行なわれていた。

「白菊」が攻撃した日にも、海軍の他の特攻隊、陸軍の多くの振武隊が攻撃を加え、相当な戦果を挙げている。それらの多くは昼間攻撃であるが、海軍には夜間特攻を行う他の特攻機もあり、特攻隊ではない夜間雷撃隊も出動していたから、「白菊」の戦果として特定することは不可能であった。

白菊特攻の評価

徳島空では三月一日の教育中止により一応課程終了として卒業した十四期予備学生、飛練三十八期の予科練十三期生のうち成績優秀者は、そのまま徳島空の教官・教員として残され、その中の幾人かは特攻隊員に加えられた。短縮速成教育、「白菊」での飛行時間力が要求されるからである。

特攻作戦の実際

「白菊」は昼間に沖縄に向って飛ぶわけにはゆかない。百％撃墜されるであろう。夜間攻撃とはいっても、月明時でないと飛べない。従って満月の前後十日間だけが特攻攻撃が可能になる。五航艦司令部は五月と六月のその時期に「白菊」の特攻を命令した。高知空は鹿屋基地に進出、徳島空は鹿屋の北東にある串良基地に進出して待機した。九州も晴天、沖縄も晴天でなければ発進できない。故に両隊は同じ日の月明下に発進している。

けれども五航艦から発進を命令してきた後、沖縄方面の天候が崩れ中止の命令が出たことがあったが、「白菊」で通信器を積んでいるのは極く一部であり、連絡はとれず、あたら悪天候に消えた特攻機も有った。

五月には両隊とも一次から三次の攻撃を実施し、六月には四次・五次の攻撃を行って白菊特攻は終った。

「白菊」による戦果は明確には確認されていない。突入時に送られる長符の通信音（電波）が絶えた時が体当り成功と思うのは人情として当然である。徳島空の未帰還機は二十八機であるが、

も僅かのまさにヒヨコである。教官になっていた海兵七十三期（兵学校卒業は十九年三月）、十三期予備学生（任官は十九年五月）も、教官配置についたのは数ヶ月前であり、実戦経験は皆無のまだ産毛の残るヒヨコである。操縦員には実戦を経験した者もあるが、「白菊」は高度の技能を要求されないので、士官の大部分は十三期予備学生であり、下士官も飛行経験の少ない者が多く彼等の飛行時間は三百時間以下であったであろう。

このように経験の浅い者が、練習機という鈍速で脆弱な機体で体当り攻撃をかけねばならない程、日本の軍備力はドン底の状態に陥っていた。然し、敢闘精神はまだ旺盛であり尽忠報国の念も強く軍紀も保たれていた。

然しながら、この「白菊」で遠い沖縄まで月明りをたよりに、海面すれすれを単機で飛んで行くことに誰もが納得していたわけではない。鹿屋、串良には零戦や天山で行く特攻隊も待機していた。白菊の隊員は「君たちは実用機で行けるから幸せだよ」と語りかけたところ、他隊の隊員たちは「白菊」が行くことに一様の驚きの表情を示したといわれている。

そのような「白菊特攻」の隊員の意識が有ったからかどうかは判然としないが、徳島空の事例からすれば、出撃した機数（それは五航艦司令部からの要求）のうち、五十五％がエンジン不調などの理由で引返して来ている。又未帰還機のうち沖縄まで到達し得た機数も少なかったであろうし、鈍速の練習機は月明の夜であれば敵の夜間戦闘機に容易に発見されたであろうし、且つ航法の失敗で海没した可能性も考えられ「白菊特攻」は関係者にとっても、異なった観点で見られる特攻作戦であったといえよう。

「高知海軍航空隊之碑」の建立

昭和五十五年、高知空白菊特攻隊の生存者四名（何れも高知県外居住者）が発起人となって、南国市の大徳寺で初の慰霊祭が行なわれ、遺族及び下宿関係者が五十名余参列した。

反響は大きく次年度よりの参加者は大幅の増加が予想されたので、高知県甲飛会主催という形で慰霊祭を行うことにして今日にまで至っている。

慰霊祭を重ねるうちに慰霊碑建立の話が持ち上り、昭和五十八年に本決りとなったので、北は北海道から南は沖縄までの旧隊員約二千名に呼びかけて浄財をつのり、昭和六十二年五月二十四日、即ち高知空第一次白菊特攻隊突入の日を記念して除幕式が行なわれた。以後、この日に近い日曜日に、毎年碑前で慰霊祭が行なわれている。

慰霊祭を主催する「高知空之碑を守る会」（会長川島正敬）の会員は甲飛第十三期（松山空後期）で、昭和十九年九月予科練を卒業、高知航空隊飛練第四十期生として入隊した高知県出身者約百名のうち、有志五十余名が会員となっている。

著者はまだ高知の地を訪れていないが、何れ訪問して碑前に額づきたいと思っている。そして協会としては、何れ五訂版を発行する計画で、この高知空慰霊碑を「特別攻撃隊」の顕彰譜に掲載することを予定していると聞いている。

なお徳島海軍航空隊の「徳空戦没者慰霊観音像」については、既に「特別攻撃隊」に掲載されているが、「徳空会」について紹介しておく。

昭和四十九年に旧隊員の間から白菊特攻隊の慰霊祭を行おうという話が起り、司令を名誉会長に、飛行隊長を会長として発足、浄財を集めて慰霊像を作り、海上自衛隊徳島航空隊基地内の記念像に安置し、昭和五十年五月十七日に第一回慰霊祭を行ない、以後毎年五月下旬に、自衛隊の儀仗隊も加わった慰霊祭が行なわれている。

高知海軍航空隊之碑

ある除幕式に参列して

会員　小栗　楓子

私事

女性の身でありながら、ここにこの文章を書くこと、聊か憚られる思いであるが、各事柄について自分の中に一つ思いがあるので書かせてもらうことにする。

実は、この度『陸軍甲種幹部候補生の碑』が、京都市東山区にある皇室縁の御寺泉湧寺山内の今熊野観音寺の本堂横に建立され、去る平成十六年十一月十三日に除幕式が行われ、それに出席したのである。

これより前八月の中旬に除幕式への出欠の回答を求める通知を頂いた。――数年前陸軍全兵科甲種幹部候補生会が設立されたこと、そしてその事業として「碑の建立」と「同制度史」の編纂の二つが挙げられていた。この「全陸軍甲種幹部候補生制度史」もこの程出版され領布されることになったと聞き二つの目的が同時に達成され慶賀の至りと思っている――。

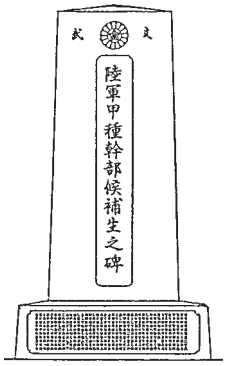
私が何時も口ぐせの様に言う故人が甲幹九期であり、特別の思いがあるので碑の除幕式には是非出席したいと思ったが、全兵科甲幹となれば大先輩であり偉い方々も大勢居られ九期等一番の若輩であり（十一期まであったと聞くが、実戦に参加したのは九期までと思う）それに女性の参加は少ないと思うが勇気を出し出席したい旨認めて事務局へ（内藤益一郎様方）返信をして置いた。そしたら十月初旬内藤さんより第二信が来て除幕式日時、会費等くわしく報らせがあった。欄外に小さな字で、私が女性が少ないからと心配していたので、女性の遺族の○○さんも又同伴で女性二十名程あるから、是非出席を、と書いて下さった。この内藤さんがこの便りを下さった直後に急逝なさって、とても驚いた。種々お世話役でお骨折り下さったのに除幕式を前にして亡くなられるとは、どんなに無念だったことかと悔やまれてならない。

当日は北海道より九州まで百五十名程の参加あり、十一月十三日は土曜日で観光シーズン真只中の京都は宿をとるのもむづかしいので遠方の人達も日帰りが多く、式、祝賀会合わせて午後一時より四時迄とのこと。私は名古屋より京都は近く勿論日帰りで悠々出席出来た。

天候にも恵まれ、時間になり式衆数人入場され厳粛に賑々しく行われた。

除幕は先輩三期四期の八人で引かれたが、さすがかくしゃく（矍鑠）としていられた。

碑はとても立派なもので材質は花崗岩、高さは台座・本体合わせて3ｍ余、横巾上96㎝下110㎝台座は三段になっていて一番下の巾が280㎝、碑の正面にきっちりとびっしりと次の文が刻まれている。



我等は肇国以来二千六百年の連綿たる歴史と比類なき文明を誇る豊葦原の瑞穂の国日本に生を享け山紫水明にして人情天地に遍き満ちた環境の中で愛国心道徳観が培われた　我々の本業は軍務でなく平時は各種分野で社会貢献を志したが祖国危急存亡の秋特に大東亜戦争では同胞数百万若人と共に国民として名誉ある兵役の義務に服し厳選されて約二十万人が各部各科甲種幹部候補生となり厳しい訓練を経て将校となりたる数実に全陸軍初級将校の約九割を占めて各種任務に就き多くは戦場第一線の指揮官となり船舶兵海上挺身戦隊でも奮戦敢闘し航空操縦将校への転科者約千名中百余名は特別攻撃隊として超然と出撃突入散華し正に甲種幹部候補生出身者の神髄を発揮　斯くて数万を越える尊い命が捧げられた　これら数多勇士の偉勲を顕彰し亡き戦友に慰霊の誠を捧げると共に子子孫孫への精神的遺産の継承と日本の繁栄と恒久の平和を願って茲に陸軍甲種幹部候補生記念の碑を建立する

そして裏面には特別攻撃隊戦死者百名余名と戦死、物故者氏名がびっしりと刻まれている。

正面は焼香の時、よく眺められたが裏面は字が細かいのと場所が狭く暗くてそれに時間がなく余りはっきり読めなかった。又、何時の日が訪れることが出来るかと思う。

全員の写真を撮り祝賀会は今熊野観音寺の大講堂で行われた。故人は騎兵隊の人に御縁がありこの祝賀会の時、御親切にいろいろお話を伺うことが出来た。考えてみれば今までに旧軍の人達の会に良く出るけれど、それは飛行隊の人の会ばかりだった。この度お会いした人は他の兵科の人だったが、気が付けば少し雰囲気が違うかなァと。親しい、親しくない、とは別の感じで思われた。私の思いすごしか、偏見か

しら。何にしてもおもわぬ会に出られてお知り合いが出来これも故人のお蔭と思わずにはいられない。

この甲幹の人達は碑の正面にある通り予備役であり軍人が本職でなく皆様、その道の専門知識技量があり、本職は他に持っている人達である。それが幸いして終戦になった時、本分は定まっているので、いち早く本職に戻り他を顧る暇なんかなく生きることに一杯だったので、心の中では思っていてもあの激しかった体験や戦友を憶うのはやはり生活に少し余裕が出来てからだったと思う。それで戦友会等の出来るのも戦後何年か経ってからの様である。

何事も少し遅きに失した、と言う感じである。内藤さんの急逝もそうであるが、既に大勢の人達が亡くなっているので。――と言ってそれが悪いとか、私がそんなことをとや角批判する資格はない。直ぐに戦後の復興に一生貢献なさっているのだから――。何にしても皆様の総意の結集に依って立派な事業が成就したことは大変慶ばしいことと思う。

始めに除幕式に出席するのに特別の思いがあるのでと書いたが、それは甲幹の人達は初年兵の時、とても苦労なさったと聞いている。辛い苦労に堪え幹候の試験を受け。そして短い期間に技術と指揮官たるべき修行を終えるのだから、男の人って偉いなァと思ってしまう。

故人も泣き言は言わない人だったけれど、家族へ辛いとは言ってないけど、それを想像出来る手紙を出している。そんな苦労にも堪え自分で思った通りに進み、それが認められて碑にも名前が刻まれていると思えば、私はそれを讃えて上げたかったので。

折から来年の歌会始は一月十四日と新聞に発表になっている。

御題は「歩む」

八十路越え歩みし道に悔いはなし
常世の人を憶い暮すも

こんな歌が出来て自分の人生の究極も近く同じ世へゆく日もそんなに遠くはないのも確か。

除幕式に出席して、思いかけない人生の究極に近づいてしまったのでこの辺りで一服と言うことにしよう。

編者注　文中故人とあるは105振武隊長林義則で20年4月22日沖縄近海戦死、幹候九期、騎兵から転科

［今季節の文苑］

梅花の賛

さ庭の隅に咲く梅の
色も香りも細やかに
厳しい寒さ凌ぎきて
春の訪れ告げるとも
弥生わかたぬ梅の花

こち吹かばと詠った道真公、遠い平安の昔から伝えられている故事。梅の花は日本人の心情に何か訴えるものがある。桜のような華やかさはない。散り際の風情もないが、寒気を凌ぎ一輪づつ開くところにえもいえぬ趣がある。そして春陽を待たず消えてゆく。

梅一りん一りんづつの暖かさ

唐の昔玄宗の妃だった梅妃は、居所悉く梅を植えていたので梅妃と呼ばれていた。楊貴妃に寵を奪はれ、長門殿に空しく日を送っていた。ある日玄宗帝が憐れに思い珍しい珠を贈ったが受けず、一詩を奉った。

桂葉双眉久しく描かず
残妝涙に和して紅綃を汚す
長門尽日梳洗無し
何ぞ必ずしも珍味寂寥を慰めん

妝＝粧　紅綃＝赤い絹布

栄耀のかげにひそかな梅の花

四字熟語

漢字には字自体に意味がある。それが四字に組むと意味は更に鮮烈である先ず手近かなところから一例を挙げてみれば、忠君愛国、敬天愛人、義勇奉公、いくらでもある。近ごろ会話でも文章でも片仮名が氾濫している。片仮名は発音記号だから文字自体には意味はない。片仮名言葉ばかり使っている者には、四字熟語の雰囲気が味わえない哀れな人間だと同情する。

ところで記事割付の埋草として同類のものを列挙してみる。

（生死関頭）
生死一如　決死敢闘　一死報国
（毀誉褒貶）
清廉潔白　旗幟鮮明　明鏡止水
（歩武堂々）
剣光帽影　百戦錬磨　意気昇天
（眉目秀麗）
明眸皓歯　容姿端麗　紅粉青蛾
一顧傾国　容貌魁偉　英姿颯々
（豪放磊落）
剛毅朴訥　清濁併呑　威風隆々
泰然自若　気骨稜々　抜山蓋世
（浅学菲才）
博学多才　田夫野人　粗辞拙文
無知蒙昧　一知半解　井蛙之見
（鴛鴦之契）
比翼連理　偕老同穴　琴瑟相和

陸軍特別攻撃隊第七九振武隊故 田中富太郎大尉の記録

特幹一期生　深井　正昭

今夏『子犬を抱いた少年特攻隊員荒木幸雄少尉を偲ぶ集い』が出身地の群馬県桐生市で開催され、参加したことが縁となり第七九振武隊 田中富太郎大尉と親しい縁戚の池田いね様を知り、昭和五十九年四月に出版された「礎 故 田中富太郎の記録」なるB5判・58ページの小冊子で、編集者ご令兄小滝政利氏により作成され、大尉の幼年時代や、特攻出撃前の慌しい面会と帰郷、父へ宛てた最後の手紙等とともに想い出の写真集も載せてある貴重な記録を拝読する機会に恵まれた。

五年ほど前、群馬県関係陸海軍特攻戦没者遺芳録を編集すべく、田中富太郎大尉の生家を尋ね墓参して、墓誌等を書き写して来たが、生家のご遺族からはこのような冊子が編集・出版されていることについては何も伺うことがなかったので驚いた次第であった。

〝名月赤城山〟で名高い上州の生んだ侠客 国定忠治が関所破りの禁を犯して磔の刑になった大戸関所の有った群馬県吾妻郡坂上村大戸（現 吾妻町大戸）で手広く酒・煙草や日用雑貨類を商う田中屋商店経営の、父 實氏 母 まつさんの兄三人、姉二人の六番目の末っ子として誕生した。

この記録は、学徒出陣令に伴って特操を志願、若くして航空特攻で散華した末弟の心情を偲び、後世にその足跡を語り継ぎ、世界恒久平和の礎となることを祈念して、生家を始め兄弟姉妹たちの協力によって編集・発行されたことが前書きされている。

記録の編集順とは若干前後はするがその概要を紹介したい。

◎田中家墓地と富太郎大尉のお墓

生家前の国道四〇六号線を大戸関所跡の方へ少し歩いて左折、国道の裏通りに当たる細い道を北東へ三〇〇m程のところ、雑木林と梅林に囲まれた一角に田中家墓地があり、その中央に立派な富太郎大尉の墓石が建立され、次ぎのように刻まれている。

墓石　正面
正七位
陸軍大尉　勲五等　田中富太郎之命神璽
功三級

墓石　左横　墓誌
大正十二年一月二日出生 實 四男 昭和十二年四月県立中之條農業学校入学
同十五年三月同校卒業同年四月中之條税務署勤務 昭和十六年二月二十日東京都世田谷税務署転勤 同年四月明治大学専門部法科本科入学 同十八年九月同校卒業 同年十月一日埼玉県熊谷陸軍飛行学校入学 同十九年十月陸軍少尉任官 昭和二十年四月十六日沖縄島周辺の戦闘に於て戦死 二階級特進正七位勲五等功三級を賜る。

墓石　右横　遺墨
敵艦に玉と砕けて靖国の神にしならんと號 学鷲 陸軍特別攻撃隊山田隊
田中少尉 花押

墓石　裏面　昭和二十九年九月
父實 建立

◎父に宛てた最後の手紙と手記の一部

前略
五日桶川を発ち同日岐阜に到着、一泊した六日朝岐阜出発、途中無事小月に到着致しました。昼食後命に依り直ちに九州鹿児島の知覧迄前進を命ぜられ、明七日六時に小月を出発することになり小月町の旅館に投宿しました。
思ったより早く、或いはこの便りのつく頃はもう大事を決行するかも知れません。
本日を以って第一航空軍第五二飛行師団第五四〇部隊ともすっかり縁が切れ、第六航空軍の隷下に入りました。
名は振武隊第七九隊と略決定しました。
知覧より敵の居る沖縄迄は一時間ばかりですからいよいよ戦場気分になれると思います。
全員皆元気で張り切って居ります。
此方はもうすっかり桜も咲き暖かいです。
また、若し映画等にて飛行機を見たら次の標識にご注意下さい。
尚、これから何度便りが出来るか分かりませんが、私よりの便りの状況は父上様より皆様にお伝え下さい
父上様の御存知ない人では吉葉吉宗栃木市入船町五五加藤孝夫君この二名には済みませんがお知らせ下さい。
私は至極元気です。何の心配もなく張り切って居ります故何卒ご安心下さい。
父上様ははじめ皆々様の御健闘を祈ります。

父上様　　富太郎

◎田中富太郎大尉手記の一部

昭和二十年三月二十八日　水曜　霞模様
名も改めて卜号要員何となく晴々とした気持ちである。宛ら豊臣の天下を取った心境と同様ならん。「人は一代名は末代」とか言う。全くその通りである。君の為また己を知ってくれる者の為に笑って散るは男子の望むところである。

二代目区隊長それは此度「ト号」中隊長に昇進された人情区隊長山田少尉である。且つて小官がこの人なら生命を共にしたいと言ったことがある。その念願叶って腹心の主従として大任を拝命することが出来たのである。十時、命により本部連絡の直協にて中隊長と本部に飛ぶ。この飛行機にて特攻をするのかと思うと懐かしさを覚ゆ。若干の用事を済ませ本部佐尉官室に初代区隊長を訪問す。初代区隊長それは昨十八年秋より翌十九年春迄、学生当時の人情区隊長である清水大尉殿それである。「うまいもの持って来たか」とニコニコとして言われる。話は無くとも相対して居る丈で何とも云えない嬉しさを覚ゆ。「徳」の力は斯くも偉大なるものなり。帰路九九高錬を操縦して帰る。

午後、航空隊の西岡少尉来られ夕刻迄居られたり

終日トランプにて暮らす生活も楽ではなく苦しいものである。

昭和二十年三月二十九日　木曜　晴

十三時 将校室にて中隊長の訓示あり。我々は立派な任務に就いて居ることを限りなく光栄に思うて居る。我々の日常は他の模範たらねばならぬ。死したる後に於ても後指をさされるが如きがあっては絶対に相成らぬのである。吾々は自重自愛して任務達成迄絶対に斃れてはならない。

吾々は負荷の大任を全うする迄黙々として訓練に邁進し最後のその時迄栄えある陸鷲将校としての矜持を保たねばならないことを痛感せり。

十四時より格納庫にて九九高練の取扱法を実施す。

亡母逝って四年、長兄は召しに応じて早や七年を過ぎ、次兄亦然り。老後の静養もなく只管長兄の留守を守りゆくおいたる父を思えばいささか淋しさを覚ゆるも、皇国浮沈の瀬戸際にありては、それ皆小さきことなり。日本ありてその父であり、兄であり、また姉なり。

吾々の死により皇国を守護し而して一億を救うを得ば実に嬉しきことなり。

松陰先生は云う「二十歳の死が惜しければ、五十 百の死も惜しく松柏の如く幾百幾千の寿命を有すも之で長しとせず 虫の如く数日にして死するも之を以って短しとはしない 人間また然り」

敵B29吾が上空を高々度にて悠々と飛行す　今に見ろ

昭和二十年四月六日　金曜　晴

八時岐阜出発、十一時小月着。夜吉田屋旅館に投宿。小月飛行場にても、亦旅館にても大いに待遇され恐縮す。夜最後の会食を実施す。

昭和二十年四月七日　土曜　曇

三時半起床、隊にて朝食後六時出発。知覧に向う。知覧は正に戦場に等しく、九時より夕刻迄出撃命令を待ちたるも命なく一泊す。一〇七特攻隊と同宿、三角兵舎に一泊す。中沢准尉に逢う。全員大いに張り切り、興奮また張り切る。

昭和二十年四月八日　日曜　晴

九時知覧出発小月へ帰還す。途中澤田一等兵を同乗、福岡の第六航空軍司令部へ立寄る。軍司令部にて種々用事を済ませ、菅原道大軍司令官閣下の乗用車にて飛行場迄見送らる。大いに感謝す。金三〇〇円及びウヰスキー一本を頂戴す。夜小月操縦者の保健寮へ投宿会食す。

明野忠魂塔の合祀慰霊祭

深山　明敏

秋晴れの10月29日、明野忠魂塔の平成16年度合祀慰霊祭が陸上自衛隊明野駐屯地において、厳粛・盛大に実施され、筆者は山本会長の代理として初めて参列させていただきました。

明野忠魂塔慰霊祭の特色は、帝国陸軍の明野で勤務された戦没者と陸上自衛隊航空学校の殉職者を、陸上自衛隊明野駐屯地内に建立されている忠魂塔に合祀し、大空に散華された戦前と戦後の両方の尊い犠牲者の慰霊祭を、明野忠魂塔顕彰会と陸上自衛隊航空学校が合同で毎年秋に実施されていることであり、全国でも極めて珍しい慰霊祭であります。まさに、陸軍航空兵の精神と伝統が今日に至るまで継承されている好例と言えます。

今回、明野忠魂塔顕彰会の参拝者は、谷口正義会長以下230名で、生死を共にされた昔の仲間が、東北や九州からも参加され、ご家族同伴のご高齢者も目につき、今更ながら特攻隊関係者の絆の強さを痛感いたしました。

陸上自衛隊航空学校（宇都宮分校・霞ヶ浦分校を含む）の殉職者は、今年新たに合祀された2柱を含めて合計14柱であります。

新たな合祀は、本年2月23日、対戦車ヘリコプターの操縦教育中に、伊勢志摩の山中で航空事故のため殉職された教官と学生の2柱です。明野では、昭和37年以来の事故で42年ぶりの殉職者だったそうです。

昭和37年には、私の同期生の原田君が伊勢湾で殉職しているので、心からご冥福をお祈りさせていただきました。原田君は、防大2年の時、同室で2段ベッドの上下で1年間過ごした友人であり、硬式野球に熱中していた好青年でしたが、陸自の同期生で最初の殉職者になりました。新婚生活も束の間のうちに不幸に見舞われた奥様は、その後も健気にお一人で慰霊の火を灯しながら沖縄で暮らしておられ、防大における記念行事や師団の慰霊祭などで私もお会いしています。

参列者全員の献花・参拝、陸上自衛隊中部方面音楽隊の慰霊演奏、航空学校のヘリコプターによる慰霊飛行などに続き、遺族代表として今回合祀された故中田3佐の長男（高校1年の貴士君）が立派な挨拶をなさいました。

亡父の慈愛に満ちた温情に対する素直な尊敬の気持ち、哀惜の念、淋しさ、周囲から受けた温かい激励に対する感謝の気持ちなどを率直に語られ、参列者の涙を誘うものでした。あのように素晴らしいご家庭を一瞬のうちに不幸に陥れた悲運に、やりきれない思いをさせられました。

おそらく、戦争中の空の勇士たちやご遺族も同様の深刻なお気持ちを抱いておられたことと拝察いたします。

この忠魂塔の慰霊顕彰については、将来も自衛隊等の関係者が確実に継承して行くので、ご遺族などにもご安心いただけるものと思います。

英霊の安らかなご冥福とご遺族に対するご加護を心からお祈り申し上げた次第であります。

所在地　三重県度会郡小俣町明野
陸上自衛隊航空学校内

建立　昭和17年12月18日

例祭　毎年11月1日に近い土曜日

謝辞を述べる中田貴士君

御遺族の方々

川南護国神社例祭

田中　賢一

毎年十一月二十三日に町長が祭主となって盛大な例祭を実施していることや、この社の御祭神は地元出身の英霊は六三四柱なるに、我々の戦友である挺進部隊の戦死者が一万余柱である事など、既に度々この会報で紹介した。

そんな経緯があるので、毎年私は町長に続いて一文を奏上している。本年もその積りで奏上文を書いてあったが体調整はず欠席せざるを得なくなったので、都城在住の高橋勝夫君に代読してもらった。この人は挺進第三聯隊の一員でルソン島で戦い、数少ない生残りの一人である。

川南護国神社に斎き祀る挺進部隊

御祭神に捧ぐ

天孫降臨の聖地日向の一隅にあるこの社に　我等が戦友の祀られあるは
意義極めて深きものを覚ゆ　我等昭
和十六年秋この地に来り　初めて落
下傘降下を行いし時　天孫降臨の神
兵と称されしことあればなり　爾来
この社の西に接せる降下場で　訓練
せしつわもの数千名　国民の與望を
担い　あるいは救国の悲願に燃え
南の戦場に向いぬ
パレンバンの緒戦は眩いばかりの勝
利に輝けど　戦争末期の比島の戦場
に在りては　レイテ作戦をはじめと
し　ルソン島　ネグロス島に　数多
の戦友が護国の神となりぬ　空挺戦
史の掉尾を飾る沖縄特攻の義烈空挺
隊に至りては　世界戦史に類を見ざ
る壮挙にして　全員国に殉ぜられぬ
更にまた訓練中職に殉ぜられし者少
なからず
挺身殉国の合言葉のもと　国の礎石
となりしつわものが　この地に育成
せられしことに思い致せば　社の柱
甍の隅々まで　忠誠心の沁み入るを
覚ゆ
熟々思うに　我等が第二の故郷とも
言うべき川南の土地柄の　精強部隊
錬成に寄与せられしこと　甚大なり
と言はざるべからず　ここに地元出
身英霊と共に斎き祀らるる縁も　ま
た深きものありと言うべし
我等生き残りたる者共　亡き戦友を
慕いてこの祭りに参ずるも　寄る年
波　年々減少するは致し方なきこと
なり　やがて絶ゆるも　祭祀は地元
の人々により未来永劫に続けらるべ
し　亡き戦友よ　御心泰く神鎮まり
給え

町長の祭文にもこの地で錬成した挺進部隊の御祭神に対する畏敬の念が、綿々とのべられている。

世田谷山観音寺の文化財紹介(1)

お寺には、先代睦賢和尚が集めた、多くの由緒ある建物や碑等の文化財があります。これから当分の間、特攻誌上に之等を順次紹介して行くことに致しました。

賢照和尚からの聞き書きを元に纏めました。文責は協会にあります。（編集部）

一、竹田元宮様の揮毫碑

お寺の表門、向って左側にこの碑は建っている。

昭和40年代初めに、賢照和尚が直接お願いして揮毫して戴いたもの。当時和尚は、月に一回は東久邇、竹田両元宮様のお邸に参上して居られた。

余り毛筆にはなじんでいない、と初めは渋っておられた竹田様を、家令の応援によって実現に漕ぎ着けた。

二、門柱

右側には、表・世田谷山観音寺（その左下に）吉田　茂書、裏・昭和二十八年七月吉日　開山　太田睦賢　建立と刻まれている。

睦賢和尚は精養堂の縁で、戦前から地元に住む賀屋興宣氏と親交があり、戦後氏の政界復帰（衆院選）に大いに貢献されたことから、吉田首相以下当時の自由党の主要人物とは、大変親交があった。その様な関係から門柱の揮毫を、吉田首相は快く引受けられたのであろう。

平成十六年度回天烈士ならびに回天搭載潜水艦戦没乗員追悼式参列報告

評議員　小瀬　利春

山口県周南市の大津島に於いて回天戦没者の慰霊祭が昭和三十年以降、毎年開催されており、回天作戦に参加して戦没した潜水艦八隻の乗員の銘牌が平成三年に回天碑に並んで建設されて以降、併せて追悼する式典となって毎年十一月の開催が続けられている。

本年度は回天特別攻撃隊の初陣「菊水隊」の出撃六十周年に当たり、地元有志による団体「回天顕彰会」の主催によって前夜祭が山口県周南総合庁舎のホールで開かれた。回天に因む詩吟と舞踊に続いて海上自衛隊佐世保音楽隊の演奏があった。行進曲「威風堂々」ほか世界の吹奏楽の名曲と「荒城の月」など日本的な叙情の曲が次々と演奏された。三十人以上の隊員による、各曲目とも流麗で見事な演奏であったが、圧倒的な迫力に満ちていたのはやはり最後の「行進曲・軍艦」いわゆる軍艦マーチであった。

近年は追悼式が毎年十一月の第二日曜日の午後一時三十分から大津島の回天碑の前で挙行されており、本年は十一月十四日の開催であった。そのころ天候が安定せず、当日の朝方は雨であった。式場で全員が着席し、いよいよ開式という時刻に突然陽光が射し始め、張ってあった天幕を急遽撤去した上での開始となった。慰霊飛行の各編隊も青空に輝いて頭上を通り過ぎた。そして式典終了と同時に満天の雲となり、やがて雨となった。天の配慮か、単なる偶然とは思えない恵みの天気であった。

御遺族の参加は北海道から九州までの三四人であった。戦没者よりかなり年下の弟妹や甥姪の参加が中心となってきたのは、高齢化が進むなか自然の成り行きであろう。そのなかで回天轟隊伊三六潜の先任搭乗員故・池淵信夫少佐の夫人が例年どおり出席された。同少佐は特攻訓練中に正式に結婚されていた。私は特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会を代表、また全国回天会会長として、最前列の来賓席を与えられて参列した。

山口県知事、周南市長、市議会議長、参議院議員、呉地方総監の追悼のことばがあり、続いて御遺族から始まる献花があった。

回天初出撃の菊水隊の攻撃により西カロリン諸島ウルシー泊地で撃沈された米海軍油送艦ミシシネワの戦友会から寄せられた長文の懇篤なメッセージが読み上げられた。「回天特攻の真実の探求を通じて互に理解し、日米双方関係者の心は結びついたが、今後も戦中にあった特攻の事実に対する理解を一層深め、将来の世代に継承して、すべての人々との間に友情と平和を育んでゆきたい」と同戦友会は切望している。

周南市の青年有志による恒例の「大徳山太鼓・回天」はいつもながら胸を打つ。その真摯な演奏に耳を傾けると、往時多くの搭乗員たちがこの基地から出撃してゆく顔や姿が眼前に浮かぶ思いである。

回天顕彰会には近在の自衛隊ＯＢほか有志の加入があり、本慰霊行事が地元に支えられて今後とも長く続くものと期待される。

明平成十七年度は十一月十三日（日曜）の開催予定である。

菊水隊出撃　19・11・8

大津島回天記念館前
回天－型改－実物大模型

戦没者の銘碑がならぶ回天記念館前の道

第37回予科練戦没者慰霊祭

菅原　道熙

㈶海原会が主催する第37回予科練戦没者慰霊祭は、平成16年10月31日㈰10時30分から土浦市の隣、阿見町の陸上自衛隊武器学校で挙行された。

夜来の雨で、学校内雄翔園で行われる式典は、雨天式場（SSM実習場）に変更されたが、皮肉なことに、開式直前になって急に薄日が差し出した。

定刻10時30分、太宰信明氏（甲飛14期）の司会で開式。実行委員長、丙飛会会長大原亮治氏（丙飛4期）が開式の辞を述べる。

次いで陸上自衛隊勝田駐屯地音楽隊の伴奏で国歌斉唱が行われ、引続き昔懐かしい予科練の七つボタンの白と紺の制服に身を包んだ、武器学校教導隊の若い自衛官2名が、慰霊碑に菊花を捧げ、同時に屋外の儀仗隊が弔銃を発射した。

続いて高松宮妃殿下の御歌、「海原にはた大空に散華せし　君等声なく幾春は経し」を、茨城県雄飛会会長坂庭儀弘氏（乙飛19期）が吟詠して、一万八千五百余柱の予科練戦没者の御霊に、御歌が献詠された。

式辞は海原会会長桜井房一氏（甲飛12期）、追悼の辞は、同窓会代表丙飛会副会長千脇　治氏（丙飛4期）がそれぞれ述べて、来賓、遺族、各会代表の献花に移る。次いで来賓代表武器学校長飯島矢素夫陸将補、福島県から来られた遺族代表故志賀敏美氏（丙飛15期）の実弟、志賀五三三氏が、それぞれ英霊に追悼の言葉を捧げられた。

次いで参加者会員が音楽隊の伴奏で、〝七つボタン〟の若鷲の歌を4番迄合唱する。この頃、本来なら開式直前に飛来する、民間有志慰霊飛行の5機が、龍ヶ崎飛行場から式場上空に到達した。残念ながら参加者は爆音を耳にするのみ、機影を仰ぎ見ることは出来なかった。

音楽隊が国の鎮めを演奏し、実行副委員長立次富次郎氏（丙飛11期）が閉式の辞を述べて、定刻11時半、慰霊祭諸行事は滞りなく終了した。

実行委員の皆さんは、紺の艦内帽を被って、慰霊碑に挙手の禮をして事を進められたことは、鮮やかであった。

予科練生存者は、戦後暫く経って、「予科練之碑保存顕彰会」を結成、此処土浦海軍航空隊跡地（現陸自武器学校）に、昭和41年雄翔園を造営して、その一画に「予科練之碑」を建立、更に昭和43年に記念館「雄翔館」を竣工、予科練15年間の歴史を語り伝える貴重な資料を、展示公開するに至った。これらの予科練関連施設の建立に当っては、高松宮殿下のお力添えが大きかったとのことである。

昭和54年に、碑保存顕彰会は、「㈶海原会」となり、7月16日に日本武道館に六千余名の会員が集合、高松宮同妃両殿下の御臨席を仰いで、盛大に設立記念式典が挙行された。この様にして、予科練戦没者慰霊祭は、今年で37回目を迎えたのである。

嘗て校庭に建っていたコンクリート製の山本元帥像は、終戦時に台座は残して2分割され、上半身は一時長岡に移されたが、現在は江田島の教育参考館に置かれている。数年前敷地内に埋められていた下半身が掘出されて、像再建の気運が盛上り、予科練有志の募金によって、平成16年1月28日に、青銅製の台座共高さ4米の元帥像が、雄翔館前に復元された。

慰霊式典には台湾から15名の会員の方々が参列された。団長は懇親会の席上で、台湾独立の願望とそれに対する我が国の協力・支援を、切々として訴えられたことが印象的であった。

雄翔園内池畔に立つ予科練之像

雄翔館前庭に復元された山本元帥像

予科練制服姿の陸自衛官

新制若潮会慰霊祭

菅原　道熙

昭和42年12月3日、江田島幸ノ浦で海上挺進戦隊慰霊碑の除幕式が行われてから、毎年顕彰会の手によって続けられて来た慰霊祭は、平成15年の秋を以て打ち切られ、陸軍海上挺進隊戦没者慰霊碑顕彰会は解散した。

昭和48年11月12日小豆島に若潮の塔を建立した、陸軍船舶特別幹部候補生の全国組織である若潮会も、幸ノ浦の慰霊祭が打切りになったのに倣って、平成16年3月に解散した。

若潮会関東支部は、この機会に全国組織の新制若潮会に衣更えをして、爾後船舶特幹戦没者の慰霊祭を、靖国神社で行うこととして、平成16年11月14日13時から第一回の慰霊祭を挙行した。

面目を一新した参集殿に集合した御遺族3名、会員40名、小人数であるので直接本殿に上った。

多人数の時には、先ず拝殿に上って本殿での神職による献饌の儀、祝詞奏上が終ると、拝殿で祭文奏上・献奏楽等を行ってから、数梯団に分かれて昇殿参拝に移るのが通例であるが、今回は直接本殿に上ったので、献饌の儀・祝詞奏上を目の当りに拝して、一段と厳粛な雰囲気に浸ることが出来た。

濱野　明会長が祭文を奏上し、代表者5人の玉串奉奠に合わせて、全員が二拝・二拍手・一拝して慰霊祭は滞りなく終了した。

船舶特幹生は、昭和19年4月に一期生、一八九〇名、以後昭和20年にかけて、二期生、一九〇〇名、三期生二〇〇〇名、四期生、二一〇〇名、合計約八〇〇〇名が入隊した。

その内、㋒特攻に参加したのは一期生のみであるが、戦死者一六四五名中特攻戦死者は、協会発行の特別攻撃隊の名簿によると93名である。残り大部分は㋒出撃の機を逸して、比島・沖縄の地上戦で戦死されている。

これに対して、二～四期生全体の戦死者は57名で、その多くは原爆によるものであり、一期生とは際立った相違を示している。

慰霊祭終了後、九段会館で第一回（通算三八回）総会、引続く懇親会で来年以後の再会を期しつつ散会した。

小豆島の若潮の塔、碑面には若潮魂と刻んである

若潮の塔に面して右側手前にある特幹兵の像

㋒の水上特攻　故松本武仁（士61）画

平成17年度事業計画

1、方　針

寄付行為にある事業目的に従い、次の方針に基づいて会の健全な運営を図る。

(1) 会員の拡充と財政基盤の確立に努める

(2) 各種慰霊顕彰事業の実施と支援を行なう

(3) 特攻隊の史実研究、調査及び資料の収集整備を行なう

(4) 特別攻撃隊５訂版（最終版）の刊行準備作業を開始する

1、各種事業

(1) 例年にならい春秋の慰霊祭を実施する

(2) 全国各地における特攻隊戦没者慰霊顕彰事業への協力

(3) マバラカット・クラーク特攻基地慰霊旅行の実施

(4) 機関紙「特攻」の発行・配布

(5) 特攻隊に関する調査研究並びに資料収集に努める

(6) 平成17年５月に発足予定の(財)大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会に参加し、積極的協力と支援を行なう

(7) 新会員の加入促進

イ、日本会議、自衛隊OB会等諸団体並びに各会員に協力を求める

ロ、ホームページの更改を図ることを主として次世代会員の獲得に務める

お知らせ

理事長

1、平成16年第2回定例理事会・評議員会報告（平成16年12月7・15日）

2年の任期満了に伴い左記の役員改選が行われました。

A、理事

退任　志波武次郎・岩下邦雄（副会長）、最上貞雄・山田達雄

新任　杉山　蕃（シゲル）、藤田幸生（コウセイ）、栗原宏（常任、事務局長兼務）、臼田智子

再任　山本卓眞（会長）、瀬島龍三（名誉会長）、石野清治（副会長）、大久保隆（名誉理事）、廣島文武、菅原道熙（理事長）

B、評議員

退任　菱沼俊雄、安田義人、渡部重蔵

新任　中村家久、大穂孝子

再任　穴山正司、伊藤直之、海老澤善佐雄、河崎春美、木村元正、小灘利春、黒木　豊、田中賢一、土田八也、中江　仁、野口清三、水町博勝、皆本義博、深山明敏、宮下八郎、和田　實

2名の欠員は、早急に自衛隊OBを充当する方針であります。

C、新任者の横顔

イ、杉山理事　空自OB　統幕議長

ロ、藤田理事　海自OB　海幕長

ハ、栗原理事　空自OB　補給処課長
ニ、臼田理事　第23振武隊長伍井芳夫中佐次女
ホ、中村評議員　海兵76期、兄上海兵73期沖縄特攻戦死
ヘ、大穂評議員　元公立中学音楽教諭、世田谷区民吹奏楽団副理事長

2、慰霊旅行に就いて

旅行日程の発表と、参加者募集は次号（63号）で行いますが、概要は10月24日出発、クラーク泊、25日は早朝から慰霊祭参加、午後マバラカット市長表敬訪問、マニラ泊、26日はコレヒドール島戦跡巡拝、マニラ泊、27日はモンテンルパ訪問後帰国予定。

尚穴山評議員は引続いて、27日午後セブ島、28日にレイテ島に入り、29日マニラ経由帰国で、セブ、レイテ両島の慰霊行を計画されています。費用は一室二人でそれぞれ概算で、11万円、15万円前後となる見込みであります。

3、「次世代に是非伝えておきたいこと」（仮題）投稿のお願い

戦前・中世代と、戦後・無世代との完全な世代交代は、そう遠くない先に訪れます。次世代の人々に語り継ぐべきことが、戦前・中世代会員の皆様の脳裏に、沢山刻まれているものと思われます。

大きな歴史の流れに埋没させず、特攻戦士のみならず、援護出撃戦死等特攻同様の戦死者、それら勇士を蔭で支えた機付整備或は飛行場大隊等の知られざる苦闘の一コマ、一コマ等をお寄せ下さい。

更には、我が国は戦後奇蹟の復興を為し遂げ、世界中を瞠目させましたが、経済破綻を来して今尚その後遺症に悩まされています。この60年を省みて、次世代に言い遺したいことも、又極めて多々有るものと思われます。

慰霊顕彰が眞に継承される為には、古来我が国に培われて来た伝統と文化の継承を伴わないと、仏造って魂入らずに終ってしまうでありましょう。

現在の世相を眺めて是非次世代に伝えておきたいことも又沢山お持ちでしょう。その方面のことも、積極的な御投稿をお待ちします。

特に投稿期限は設けません。題名は適当にお付け下さい。長大な論文的なものではなく、的を搾って一応400字詰原稿用紙20枚を限度としてお考え下さい。字真があれば尚結構であります。

4、特攻59号5頁上段15行目からは、次の如く訂正します。

翌28年7月に本堂の聖観音の傍に遷座された。開眼一年後の法要が在家で行われたのか、遷座後に世田谷山観音寺で行われたのかに関しては定かではない。

注

河邊元陸軍大将と及川元海軍大将が昭和31年3月に、特攻平和観音奉賛会会員に発送した挨拶状が発見された結果の訂正であります。

5、学生会員制の創設

年会費千円の学生（大学生以下）会員制度を設けました。若い次世代会員加入に御協力をお願いします。

6、東京都神道青年会からのお願い

本会は40才以下の東京都神職の会で、5年毎に慰霊旅行を行っています。今年は2月21日から3泊4日で、知覧・沖縄を訪れ、23日に摩文仁東京の塔前で慰霊祭を施行します。

その際左記条件に叶う英霊の姓名と享年を読上げるので希望される方は、〒156-0051 世田谷区宮坂一―二三―二〇

世田谷八幡宮内　蔵重命弘

〇三―三四二九―一七三二

に2月10日迄に電話で申込んで下さい。

A、都在住会員（遺族・戦友）が希望する英霊

B、都以外の府県在住会員の場合は、英霊の本籍が東京都であれば受付ける。

特攻61号訂正

頁	段	行	誤	正
38	4	11	10年	40年
40	2	6	兵曹長	兵曹
〃	3	12	照合	照会
〃	〃	18	兵曹長	兵曹
46	3	14	上空で	上空の
〃	〃	17	高尾	高雄
〃	4	7		
47	1	4		
〃	2	2		
〃	〃	5	兵曹長	兵曹
〃	3	13		
〃	〃	18		
〃	〃	22		
46	4	6	以下、次の様に訂正	

宜蘭駅の待合室で、歌田様とガイドが話しているのを聞いて、西条八十作詞の「雨に咲く花」の原歌は、鄧雨賢（トウウケン）が作詞した「雨夜花（ウヤホエ）」であると話し、台湾語の歌詩を私が書いて示し、一緒に歌って教えてあげた。

特攻会報42号及び52～61号
総目録

靖国神社における特攻合同慰霊祭

号　年　月　頁

55（15・5）1　祭典
59（16・5）1　祭典

世田谷特攻観音年次法要

53（14・11）1　年次法要
57（15・11）1　年次法要
61（16・11）1　年次法要

各地の慰霊行事

42（12・2）19　若潮会関東地区慰霊祭り
52（14・8）20　回天追悼式
15　殉国沖縄学徒顕彰祭
19　都城特攻慰霊祭遺族挨拶
23　沖縄巡拝記事
54（15・2）14　川南護国神社例祭
16　水戸つばさの塔慰霊祭
18　特操顕彰碑々前祭
21　大津島における回天追悼式
56（15・8）14　知覧特攻基地慰霊祭
26　殉国沖縄学徒顕彰祭
18　陸軍航空碑々前祀
19　都城特攻碑慰霊祭
20　陸軍挺進部隊慰霊祭
21　義烈空挺隊碑前祭
25　靖国神社特攻慰霊祭の歌
58（16・2）8　慰霊顕彰行事（海上挺進戦隊回天、特操碑、空挺部隊、若潮の塔）
59（16・5）3　航空碑々前祭
60（16・8）3　殉国沖縄学徒顕彰祭
5　義烈空挺隊慰霊祭
13　海上挺進戦隊慰霊祭
14　海上挺進第三戦隊慰霊祭
27　第二艦隊追悼式
34　慰霊祭で響いた海ゆかば
36　慰霊祭について思うこと
37　台湾巡拝記
61（16・11）16　特攻隊員荒木幸雄を偲ぶ会
25　浅間山の噴火に思う

航空特攻（対艦船）

52（14・8）5　沖縄に散った特操一期の戦友②
21　死の恐怖が断ち切れた日
53（14・11）8　原町飛行場関係戦歿者慰霊祭
54（15・2）16　水戸つばさの塔慰霊祭
18　特操顕彰の碑々前祭
19　マパラカット式典に参加
23　敵艦に突入し氏名が判明した者
24　米太平洋艦隊司令長官の日記
32　富嶽隊と万朶隊
55（15・5）20　竹田恒徳著「私の肖像画」より
護衛機の自爆
28　為安井昭一　島津源吉と書かれていた日章旗
56（15・8）1　字垣纏の最後の特攻
6　名古屋飛行学校の思い出
8　大西滝治郎の遺書
9　安井少尉の日章旗帰る
19　都城特攻慰霊祭
57（15・11）4　字垣纏の戦藻録抜
9　父の足跡を追って
14　特攻隊長伍井芳夫
17　名古屋飛行学校の思い出で
21　安井少尉の御遺族判明
58（16・2）3　あの人が特攻戦死より五十八年
9　慰霊顕彰行事特操碑
12　特攻隊補給品の空輸
18　ある偶然のきっかけで思うこと
19　字垣纏の戦藻録抜
59（16・5）15　特攻機の掩護
20　富嶽隊員の遺書
28　特攻の嚆矢友永大尉
33　米空母に突入した俊助兄
60（16・8）16　特攻隊員「トミ・ザイ」とは誰
20　ある特攻将校の生涯
24　無名勇士之墓
28　特攻に逝ける同期の戦友を悼む
30　ある特攻戦没者とその弟
31　知覧慰霊祭
33　鹿屋基地慰霊祭
37　台湾特攻基地巡拝（上）
61（16・11）9　ある従軍カメラマンと特攻隊
12　偵察将校の話
14　神風特攻を偲んで
16　特攻隊員荒木幸雄を偲ぶ集い
25　浅間山の噴火に思う

61　台湾特攻基地巡拝（下）

航空特攻（対敵基地）

57（15・11）22　第一御楯隊の全記録抜①）8
8　第一御楯隊の全記録抜②
60（16・8）32　六十年振りに手にし父の遺影

空挺特攻

53（14・11）15　特攻隊員の終戦　空挺隊員の部
24　戦歿空挺隊員の御霊の在ます所
54（15・2）14　川南護国神社例祭
55（15・5）20　終戦時自決した空挺隊員
25　今期の戦史　ラシオ空挺作戦
56（15・8）12　第一挺進団の天覧演習
20　陸軍挺進部隊慰霊祭
21　義烈挺進隊慰霊祭
57（15・11）10　レイテ空挺作戦にみる忘れられない人々
58（16・2）10　川南護国神社例祭
61（16・11）19　高野山にある空挺部隊の墓
20　中野学校出身の義烈空挺隊員

回天

42（12・2）8　忘れ難い人たち④
20　回天追悼式
54（15・2）21　大津島における回天追悼式
29　沖縄「平和の礎」回天関係刻名
56（15・8）24　回天に沈められた米艦の戦友会

陸軍海上挺進㊤

42（12・2）19　若潮会関東支部慰霊祭
58（16・2）8　陸軍海上挺進戦隊慰霊祭
60（16・8）12　壁に尽忠の血書
13　陸軍海上挺進戦隊
14　海上挺進戦隊最後の慰霊祭

震洋

52（14・8）18　「金武鎮魂碑」建立の由来

今期の戦史

55（15・5）25　①戦史に登場出来なかったラシオ空挺作戦
56（15・8）12　②第一挺進団の天覧演習
57（15・11）10　③レイテ空挺作戦にみる忘れられない人々
58（16・2）15　④十二月八日の作戦
61（16・11）26　⑤ガ島の攻防その一

靖国神社

52（14・8）1　靖国神社みたま祭
2　靖国神社御祭神の御心
53（14・11）3　特攻隊員の遺骨遺詠にみる靖国神社
54（15・2）1　「追悼懇」の答申に反撥
2　元旦の零時に靖国神社に参拝
55（15・5）2　遊就舘の特攻関係展示品
56（15・8）1　靖国神社みたま祭
5　八月十五日の靖国神社
25　靖国神社特攻慰霊祭の詠
30　靖国神社々頭の掲示
57（15・11）2　八月十五日の靖国神社
58（16・2）24　靖国神社初詣の記
59（16・5）34　靖国御祭神について憶うこと
60（16・8）1　みたま祭と会員の雪洞献納
2　みたま祭の雪洞で見たもの
61（16・11）4　靖国社頭の掲示①
18　特操の像遊就舘に展示

巡拝記

60（16・8）37　台湾・宮古・石垣特攻基地巡拝①
61（16・11）35　台湾・宮古・石垣特攻基地巡拝②

遺書遺詠等

42（12・2）3　特攻隊員の日記②
16　特攻隊員の手紙①
59（16・5）20　富嶽隊員の遺書

その他

42（12・2）1　十二月八日の歴史
5　騎兵出身の特攻隊員
10　原町飛行場の慰霊碑と慰霊祭
15　小丸川殉職碑と榊原大尉
17　姫路海軍航空隊跡の碑除幕式
18　映画上映会の報告
52（14・8）20　特攻隊員に敬虔な祈り
53（14・11）10　追悼　飯野伴七君・松本武仁君
11　松本武仁君の絵
54（15・2）3　特攻隊員の終戦について①
22　飯野伴七理事を偲ぶ

55（15・5）5 特攻隊員の終戦について②
21 禅語に接し特攻隊員の心情①
24 文芸欄の新設
56（15・8）9 特攻観音堂補修費寄付お願い
10 野崎慶三氏を偲ぶ
11 戦艦大和以下特攻艦隊の碑
31 協会頒布図書のお知らせ
20 文芸欄
32 特攻会報編集の主眼
57（15・11）3 歌人三井甲之の歌碑
20 禅語に接し特攻隊員の心情②
26 ハンガリー日本博物館について
29 特攻観音堂補修費寄進者名
60（16・8）35 シェフタル氏と静大ゼミ
61（16・11）13 「梯梧の塔」について
17 「海ゆかば」の出所
22 特攻艦隊大和の最後
26 今期の戦史⑤ガ島の攻防
30 協会よりお知らせ
31 新入会員名簿

投稿募集

今年は敗戦に涙してから六十年昭和二十年は乙酉（きのととり）、今年は還暦となる。あの時特攻隊はどうしていたか。

自ら特攻隊として配置に就いていた者また身近な者がそうであった記録など後世に言い残しておくことを、航空特攻、空挺特攻、水中特攻、水上特攻毎に本誌に掲載致したい。これは研究論文ではない、体験談なので、我が会の会員以外には書けない筈であり、書き残すことは我々の責務でもある。

同じ事象を別の人が書いて重複しても一向に構はない。出来たものより次号から掲載する。

これとは別に特攻隊員で終戦時自決した者のことも掲載したい。これは既に掲載済みのものもあるが、書き足すことがあれば出してもらいたい。なければ何号にあると告げて欲しい。

以上のことは会報に掲載した後単行本として出すことも考えている。体験者の余命は少ない。お国を念う遺言ともならう。

滑空大挺進作戦を夢みて成らず

田中　賢一

滑空挺進部隊

滑空機搭乗の挺進部隊は滑空歩兵第一、第二聯隊（西筑波）、挺進機関砲隊（西筑波）、挺進通信隊（唐瀬原）、挺進工兵隊（唐瀬原）等があった（所在地）。これらの部隊は19年12月に比島に向ったが、空母雲龍に搭乗した滑歩一の主力と通信、工兵の各一個中隊は台湾沖で海没してしまった。その他の部隊はルソン島に上陸し、挺工以外はクラーク西方で建武集団の中核となって戦った

西筑波上空を飛ぶクー8
滑空機このような堂々とした挺進作戦を夢みていた。

一、遠つみおやの万葉に　その名留むる筑波ねの
　霊気棚引く西筑波　ひたすら磨くつるぎ太刀
二、前人未到の滑空隊　大空に曳く　グライダー
　鵬翼つらね山河を　越えて目指すは　敵の陣
三、天馬に乗りてあま駈ける　滑空歩兵の精兵は
　大作戦を夢みつつ　日夜練武に　いとまなし
四、戦局日々に非なるとき　比島派遣の　命下る
　恨みや深し　雲龍は　戦うすべなく沈みゆく
五、辛くも上りクラークに　陣地を占る束の間に
　空地の敵は押し寄せて　山形ために　改まる
六、天地懸河の　戦勢に　支うはただに気力のみ
　矢弾尽き果て食もなく　屍を晒すルソンの野
七、残りし者は年経れど　忘ることなし亡き友よ
　再建なりて繁栄の　みそなわせあれ我が祖国

新入会員名簿

（平成十六年十月一日～十二月三十一日）

北海道
高薄満
仲田孝
浜田武夫

岩手
遠藤澄
八重樫秀雄

秋田
伊藤政雄

山形
加藤淳之助
上月友一
髙橋勝

福島
小河フク
土屋健吾

茨木
飯村新次郎
沼田修一
寺門龍一

栃木
神川清
益田澄夫

群馬
武井光司

埼玉
有馬豊司
飯島幸直
太田饒
遠藤義信
伊坪治昭
小沼彬男
菊地忠範
切通博

千葉
小山内昭三
西連寺勝久
福田春二
松永利男
秋葉公功
荒木毅
石井敏子
石田孝男
市村俊夫
太田實
上高正典
黒川一夫
白政和克
能智昌
星野文雄
松川良一
松本節
山内佐善
山川敏雄
山口武
吉元忠
秋山明
新井裕
井内慶次郎
生長松人
井上毅
岩本末治
大山隆道
尾崎卓司
神津信男
川崎昌彦
黒崎勝

東京
郷田豊
児嶋啓三郎
小村澄生
佐田保
渋谷鋭市
末吉裕郎
杉原清之
隅井えい子
竹内雄一
中崎博
長谷川清
長谷川知幸
原桃介
久本禮一
福島俊二
星隆
細田雅之
堀内好訓
丸山哲
山口健次郎
吉家寅雄
渡辺悦次
渡部利久
和地英麿
岩田弘
奥山善英
小野寺宏
河本憲恵
榊龍雄
坂本安三
白川勝人
末岡力
諏訪好文
相馬昭男
高階勇
富田和彦

神奈川
中西尚道
中林肇
船水ちか子
星野久
守田貞公
横井忠康
小林義典
坂田博
中村博志
右井幸作
森田武一
荒木勇
柿花雄造
矢田松太郎
多田樹
一瀬保
尾形隆夫
梅澤正造
斉藤昭男
田中袈裟次
小竹一三
小谷野清蔵
澤良一
宇佐美高一
鈴木幸男
多賀義明
民谷喜多男
平岡辰夫
望月豊

富山
新潟
石川
福井
山梨
長野
岐阜
静岡

愛知
新居春男
赤山琢磨
奥村亮
鍬塚昭三
鈴木満
高須剛
中埜末春
古澤誠
山西能夫
吉野毅
大谷守
大原昭二
小林俊樹
相根典男
尼子義雄
荒川伸義
伊藤龍郎
上田三郎
右近晴三郎
東川好信
藤井賢次
森忠雄
山口太刀雄
川嶋典雄
栗原巌
小嶌信勝
小林稔
中辻秀夫
稲葉崇
佐久間恒和

三重
大阪
和歌山
兵庫
岡山

広島
日山至典
耕谷信男
平岡健哉
吉木育三
吉沢章吉
山下榮
朝田一輝
長金健一
高田弘之
田中賢悟
藤澤長次
水木儀三
上久保順一朗
佐田寅夫
高橋こすみ
服部嘉之
浜田義文
宮川和扇
茨木和典
岡部順榮
小幡郭
木付辰生
古賀脩
古賀照生
白井彰
塚田征二
濱田秀逸
山田悟
吉柳きよ子

山口
徳島
香川
愛媛
高知
福岡

佐賀
岸川馨
紫村啓介

長崎
中野明子

熊本
阿部保道
冨田貞守
中尾丸喜

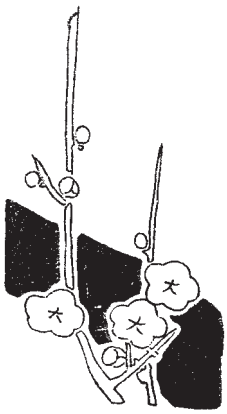
大分
石川徹

宮崎
内村豊

鹿児島
内山武保

沖縄
山内昌和

米国
伊藤麻由美



会員訃報

○**茨城**
佐藤兼基（16・11）

○**千葉**
海法秀一（16・7）
工藤俊二（15・10）

○**東京**
倉形輝一（15・7）
中河兵衛（16・4）
加藤貞一（16・7）
十束文男（16・7）
五木田博（16・8）
水尾広吉（16・9）
高品武彦（16・12）

○**神奈川**
佐藤憲郎（16・7）
桑原嶽（16・10）

○**新潟**
須藤信之助（16・2）

○**京都**
大畠實（16・）

○**広島**
古市時雄（16・2）
田村繁雄（16・11）